

『建春門院北面歌合』注釈

『建春門院北面歌合』は、嘉応二年（一一七〇）十月十九日（『玉葉』による。諸伝本では十月十六日）、建春門院^{しげ}滋子が、後白河院の御所、法住寺殿の北面の御座所で催した歌合である。『法住寺殿歌合』とも呼ばれている。主催者の建春門院^{しげ}滋子は、平時信の女で、後白河天皇の女御になり、高倉天皇の母となった人で、この前年に院号を受けている。

歌合の歌題は、関路落葉、水鳥近馴、臨期違約恋の三題で、各十番、計三十番になる。歌の作者は二十人。判者は藤原俊成である。ただし歌合の当日は、講師の読み上げる歌について衆議があり、その上で俊成が当座の判を加える形をとり、それを後日俊成が整理して記したものが、諸伝本の祖本になったと思われる。

判者の俊成は、当時五十七歳。この歌合の催されたのと同じ月には、『住吉社歌合』の判者も務めている。そして『建春門院北面歌合』の歌人二十人の内、十五人が『住吉社歌合』にも出詠した人々である（本稿末尾の『作者一覧』参照）。しかし『住吉社歌合』は、藤原敦頼が勧進して住吉神社に奉納した七十五番の歌合で、これは実際に歌人たちを集めて歌合を行なった形跡はなく、歌人たちの歌を整理して歌合の形にした原本に、俊成が後日判詞を記したものである。そのようにこの二つの歌合は成立状況が異なるので、歌も判詞も全体としてか

なり違った特色を感じさせるところがあると思う。

『建春門院北面歌合』の伝本は、甲乙二系統に分けられるが、ここでは甲本に属する北岡文庫藏幽斎書写本を底本とする『新編国歌大観』の本文によらせていただいて、解釈を試みる。ただし、句読点や返り点は私見によって新しく付した。

武 田 元 治

関路落葉

一番 左持

按察使公通

1 こらえやらでふままくをしくみゆるかな紅葉の色にはばかりの関
右 皇太后宮大夫俊成

2 色色の木の葉に路は埋もれて名をさへたどる白川の関

左歌、紅葉の色にはばかりの関と侍る心、をかしくこそ侍れ。右歌は、判者のつたなきことにはに侍りけりとはみたまへながら、歌人をかくされて侍れば、白川のせきはことに名にながれたる所なるを、しひて申しおとさむもあやしくやと思う給ふ。又、左は歌もいとをかしくみゆるうへに、一番のつがひは、かたがた誠にはばかりの関のはばかりおほく思う給へて、持などにてやと定め申しをはりぬ。

【通釈】

関路落葉

一番 左持

按察使公通

1 関を越えかね、（紅葉を）踏むのが惜しく思われる、——紅葉の色に気兼ねして行き悩む、はばかりの関よ。

右

皇太后宮大夫俊成

2 色とりどりの落ち葉で、道はうずもれて、道を尋ねる上に、（白河の）名まで不審で尋ねたくなる、白河の関よ。

左の歌は、「紅葉の色にはばかりの関」と詠んでいます心が、実に面白いと思います。右の歌は、判者である私の拙作でしたことは承知の上ですが、この歌合では歌人の名を隠されておりますので、その趣旨に従って申せば、白河の関は特に名高い歌枕ですから、その歌をあえて低く評価するのも、いかがかと存じます。一方、左は歌も大層面白く見えることですし、歌合の一番というのは、あれこれと誠にはばかりのべき点が多いと存じまして、持あたりでよろしかろうかと判定致しました。

【注】○はばかりの関 陸奥の歌枕。今の宮城県柴田郡柴田町の辺りにあったかと言われる。『枕草子』の「関は」の段に挙げられ、『後拾遺集』には藤原実方の歌「やすらはで思ひたちにし東路あづまぢにありけるものかはばかりの関」（一一三六、『実方集』二七六）ほか一首が見え、『後拾遺集』の序の一節にも「はばかりの関のはばかりながら」と記される。「憚る」にはばかりに關連して歌に詠まれるのが一般で、左歌でも掛詞にしている。左歌の場合「はばかり」は、気兼ねして行き悩む意である。○名をさへたどる 道を「たどる」上に、白河の名まで「たどる」心になる。「たどる」は、尋ねさがす、捜し求める意。色々の紅葉で白河の名が実景に合わないものとして言う。○白川の関 陸奥の歌枕。今の福島県白河市の旗宿ないし白坂の辺りにあったと見られている。陸奥への関門として下野の国との境に置かれた。『枕草子』の「関は」の段にも見えるが、『拾遺集』に収める平兼盛の歌「たよりあら

らばいかで都へつげやらむけふ白河の関は越えぬと」（三三九、『兼盛集』一一）を初め、多くの歌に詠まれる。

【考察】左の歌は、「はばかりの関」に散った紅葉をとり上げ、色美しい紅葉を踏むのが惜しく思われて進みかねている旨を詠む。「はばかりの関」を詠む際は「憚る」意を生かすのが一般に用いられる手法で、この歌では、紅葉を踏むのをはばかりで進みかねる「はばかりの関」と、掛詞にして詠んでいる。

右の歌は、「白川の関」で道を埋めた色々の木の葉をとり上げ、道を「たどる」だけでなく、ここがなぜ「白川」の名をもつのか、「たどる」気にもなると詠む。一体「白川の関」を詠んだ歌を主な着想の面で二種類に分ければ、その一つは都から遠隔の地であることを意識するもの、今一つは「白川」の名のもつ白色を意識するものである。

【注】に引いた兼盛の「たよりあらばいかで都へ」（『拾遺集』三三九）の歌などは前者に属し、この俊成の右歌などは後者に属する作であろう。なお九番右に見える平親宗の歌は、

もみち葉のみな紅に散りしけば名のみなりけり白河の関（『親宗集』六七、『千載集』三六四）

というので、この俊成の右歌と発想に似たところがある。

俊成の判詞は、左歌については、「紅葉の色にはばかりの関」と詠んだ心を「をかしく」見えると評している。右歌は俊成の自作だが、自作ゆえに遠慮して低く評価する態度はとっていない。作者を隠した歌合の趣旨を挙げなどして、作者によらず歌に即して評価する立場を示し、この場合持と判定している。当時五十七歳の俊成の、歌人としての自負のほども考えられるように思う。

二番

左勝

前大納言実定

3 山おろしに浦づたひする紅葉かないかがはすべき須磨の関守

右

新三位重家

4 もみぢちる富士の山風吹きけらし錦をたたむ浪の関もり

紅葉する（群書類従）

左歌、うらづたひするとおきて、須磨の関もりなどいへる姿ころ、いとをかしく侍るかなや。山おろしにといへる五文字、よくおかれたりこそみえ侍れ。右歌も、すがたことにきよげにみゆるを、是は清みがせきにこそはとおしはかられながら、歌の面にもみえねば、ただ浪の関といふ関のあるにやなど、すこしおぼつかなくやと申し侍りしなりとて、左の勝とす。

【通釈】

二番 左勝

前大納言実定

3 山おろしの風で、浦伝いに紅葉が吹かれてゆく、——須磨の関守は、どうしてこれを留められるだろうか。

右

新三位重家

4 紅葉を散らす富士の山風が吹いたらしい、——水の上の紅葉の錦を、波の関守が裁つことであろう。

左の歌は、「浦づたひする」と言った上で、「須磨の関守」などと詠んだ歌の姿や心が、大層面白くて感服致します。「山おろしに」と詠んだ初句の五文字は、見事に置かれたものと思われます。右の歌も、その姿がとりわけ美しく見えるのですが、これは清見が関のことであろうと推量されるものの、このことは歌の言葉には見られないから、ただ波の関という関があるのだろうかなどと、少し疑問視するような意見も出ましたところから、対する左の勝とした。

【注】○浦づたひ

海岸沿いに移動すること。『源氏物語』須磨の巻に

「浦づたひに逍遙しつづ来るに、ほかよりもおもしろきわたりなれば心とまるに」とある。また明石の巻に源氏の歌として「はるかに思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして」の一首が見えるが、これは須磨の浦からさらに遠く明石の浦に移ったことを詠んでおり、明石の巻の異名「浦づたひ」もこれに由来する。○須磨の関守 「須磨」は、摂津の国の歌枕。今の神戸市須磨区あたり。摂津の国の西端の地で、西の播磨の国との境に古く関があった。その名は『枕草子』

の「関は」の段や『源氏物語』須磨の巻に見え、詠まれた歌も多い。○錦をたたむ浪の関もり ここでは水上に散った紅葉を「錦」に例える。それを「たたむ」と言う「たつ」は裁断する意。そして紅葉の錦を裁断すると見える「浪」を、「関守」として擬人的に言う。「浪の関守」と詠んだ先例は、「さらぬだにかはらぬ袖を清見濁しばしなかけそ波の関守」(『散木奇歌集』一四五七)など。○清みが関 清見が関。駿河の国の歌枕。今の静岡市清水区興津にあった関。清見寺のあたりと言われる。『枕草子』の「関は」の段に見え、歌では波、富士などとともに詠まれることが多い。

【考察】左の歌は、山おろしの風に吹かれて「浦づたひ」する紅葉をとりあげて、これは「須磨の関守」も留めるべきであろうかと詠む。旅人を留める関守も、風に吹かれて行く紅葉は留められまいという着想の作であるが、「浦づたひ」の語は、「注」に触れたように『源氏物語』の須磨や明石の巻を思わせるところから、「須磨の関守」に縁があり、その点、表現の巧みさのえられる一首であろう。

右の歌は、「富士の山風」に吹かれて海上に散った紅葉をとり上げ、その紅葉の「錦」を「浪の関守」が裁つことであろうと詠む。海上に散った紅葉を「錦」に例え、波をその錦を裁つ「関守」に見立てている。「波の関守」の語は、「注」に挙げた清見潟を詠み入れた俊頼の歌(『散木奇歌集』一四五七)で明らかのように、清見が関を念頭に置いたものであろう。

俊成の判詞は、左歌については、「浦づたひする」紅葉と言っておいて「須磨の関守」と結んだ姿心を「いとをかし」と評している。また初句の「山おろしに」を「よく置かれたり」と評価している。これは須磨の関の背後の山の紅葉が山おろしに散らされて「浦づたひする」という情景が具体的に表わされるためであろうか。

右歌については、歌の姿が「ことにきよげに」見えると長所に触れる一方、「浪の関守」の語に関して疑問視する見方があったことを挙げ、対する左歌を勝としたと記している。

【備考】二番左歌は『千載集』（三六一）に収められている。

三番 左

藤大納言隆季

5 あふさかの関の岩かどたたきあけて木の葉もてくる風の使か

右勝

清輔朝臣

6 浪のうへに紅葉こきおろす清見潟山の高ねに嵐吹くらし

左は、歌のふるまひ心ばへをかしくはみゆるを、歌合にとりていかかとやうに申し侍りしを、関の岩かどは、良暹法師の僻事^{ひがこと}えたりけることなりき^{（群書類從）}。しかれども、彼関の岩かどふみならし山たちいづるきりはらの駒といふたを、いはの廉といへるぞ、岩のかどとよみたるぞと、あらそひの有るにこそあれ、詩にも歌にも関門といひ巖門といふことは、つねの事なれば、逢坂の関に關の岩かどとよみたらん、今も更にとがあらじと思う給へて、其事におきては、さやうに申し侍りしなり。右、紅葉こきおろす清見潟などいへる姿、よろしくはみゆ。山の高ねにといへるや、いづれの山にかとおぼつかなくきこゆらんとは申し侍りしかど、歌ざま歌合のうたとやおぼえたらんとて、右のかちにやと申し侍るなり。

【通釈】

三番 左

藤大納言隆季

5 逢坂^{おうさか}の関の（堅固な）岩門^{かど}、その戸をたたき開けて、木の葉を運んでくる風の使いよ。

右勝

清輔朝臣

6 清見潟の波の上に、紅葉を（風が）しごいて吹き下ろした、——山の高い峰に、強い風が吹くらしい。

左の歌は、歌の詠み様や心の働きが面白くは見えるけれど、歌合の歌にはどうかという風に申すことがありました。また一体「関の岩門^{かど}」は良暹法師の間違いとされたことだと理屈などを言う人がおりました。けれども、あの「（逢坂の）関の岩かど踏み

ならし山たちいづる桐原の駒^{きりはらこま}」という歌に関して、「（岩かど）は「岩の角^{かど}」と言ったのだ、いや「岩の門^{かど}」と詠んだのだと、争われたのは事実であるが、しかし漢詩でも和歌でも、関門と言ったり巖門と言ったりすることは、通常のことなので、逢坂の関について「関の岩門^{かど}」と詠んでも、それは今も全く差し支えはあるまいと存じまして、そのことについては、そのように申しましたのです。右の歌は、「紅葉こきおろす清見潟」などと詠んだ歌の姿が、結構には見える。ただ「山の高ねに」と詠んでいるのは、どの山なのかと疑問視されるだろうと申す意見もありましたが、歌の姿が歌合の歌（としてふさわしい）と思われるであろうという理由から、右の歌の勝かと判定した次第です。

【注】○あふさかの関 逢坂^{おうさか}の関。近江の国の歌枕。今の滋賀県大津市逢坂にあった。近江と山城との境の逢坂山に置かれ、平安京の東の出入り口に位置する。『枕草子』の「関は」の段にも第一に挙げられ、和歌に詠まれた例も非常に多い。歌では「逢^あふ」を掛けて詠む用例が目立つ。○岩かど 「岩角^{かど}」（岩石のかど）の場合と「岩門^{かど}」（岩屋の入り口の石の戸、または石の門で、堅固な門を言う。）の場合とがある。左歌の用例は後者の場合と思われる。なお「考察」で触れる。○こきおろす 葉や花を枝からしごいて落とす。○清見潟 駿河^{するが}の国の歌枕。今の静岡県清水区の興津清見寺付近の潟。清見寺は清見が関（一番の「注」参照）の跡と言われる。○良暹法師の僻事^{ひがこと}……「良暹^{りょうぜん}」は、生年未詳、一〇六四年ごろ没した僧侶歌人。「僻事^{ひがこと}」は、心得違いのこと。この後の底本の本文はやや疑問が残るが、良暹が「関のいはかど」の語の意味を誤解して用いたと懷円に指摘されたことを言ったと思われる。清輔の『袋草紙』には次のように記されている。「良暹^{りょうぜん}於^に或^{ある}所^{ところ}語^{こと}云、一日江州ヨリ上洛之間、於^に三云坂^{さんぐんさか}時雨ニ逢ヒ、石門^{いしかど}ニ立入テカシコクヌレズト云々。是優艶儀歟。而懷円問曰、関石門ニハ何様^{いかう}ニ被^か立入^{たていり}ニ哉。門侍歟云々。懷円咲^{わいの}テ其ハ石ノ廉^{かど}ニ侍リ。不^ふ知^し給^{たま}歟。不便^{ふびん}々々云々。良暹閉口。」要するに、良暹が逢坂の関

の「いはかど」で雨宿りをしたので濡れずにすんだと話したのに対して、懷円が「いはかど」は岩門^{かど}ではなく岩角^{かど}のことだと指摘したというのである。この懷円の指摘は、藤原高遠の歌「相坂^{あきさか}の関の岩かど踏みならし山たちいづる桐原^{きりばら}の駒」(『拾遺集』一六九)によると思われる。なお、『袋草紙』は橋為仲の歌として「あづま路のことづてやせし郭公関のいはかど今ぞすぐなる」(『為仲集』一七四では初句「あづま路に」を引き、この歌の場合「いはかど」は「岩門^{かど}」かと言っている。○関の岩かどふみならし……といふうた 前項に挙げた藤原高遠の歌。歌の大意は、逢坂の関の岩角を踏みしめて、霧の立つ中を、都に向かって山からいでたつ桐原の駒よ。「桐原」は、今の長野県松本市の周辺の牧場で、歌は駒迎えの折の作。○いはの廉 岩^{かど}の角。岩の突き出たところ。○歌合のうた 後の「考察」で触れる。

【考察】左の歌は、逢坂の関を木の葉が風に吹かれて行くことを詠むが、風を関を越えて行く使いに見立て、風が「岩門」を「たたきあけ」て木の葉を運ぶとする。このように風を具体的に擬人化して詠んだ点は、作者の工夫が見られ、一首の特徴になっていると思う。

右の歌は、清見潟の波の上に紅葉が吹き散らされているが、山の高嶺^ねに強い風が吹くらしいと詠む。清見潟は清見が関の前の潟であるから、関路の紅葉を詠んでいる点に問題はなからう。詠み様は、左歌のような目新しい着想によらず、平明で、のびやかな姿をとる。

俊成の判詞で、注目されることの一つは、「歌合の歌」という観点から左右の歌を評価していることであろう。この場合左歌については、歌の「ふるまひ心ばへ」が「をかしく」は見えるが、「歌合にとりていかか」と、問題視されたい。一方右歌については、「紅葉こきおろす清見潟」などと詠んだ「姿」を「よろしく」見えると言った上で、「歌さま歌合の歌とやおぼえたらん」と評して、右の勝と判定している。こういうことから、ここで俊成の念頭にある「歌合の歌」の観念を推測すると、左歌のような目新しい着想で面白く詠んだ作は、歌合の歌にふさわしいと言えず、右歌のような詠み様のおおらかな姿

の歌が、歌合の歌にふさわしい長所をもつと考えられているのではないかと思う。

「歌合の歌」については、後の『後鳥羽院御口伝』には、次のような言葉が見える。

歌合の歌をば、いたく思ふままには詠まずとこそ、釈阿、寂蓮などは申ししか。別の様にてはなし。題の心をよく思はへて、病なく、又源氏等の物語の歌の心をばとらず、詞をとるは苦しからずと申しき。すべて物語の歌の心をば百首歌にもとらぬ事なれども、近代は其沙汰なし。

ここに見える、題の心を考慮すること、歌病のないように注意することなども、歌合の歌には必要であったに違いなからう。ただそれらは歌合の歌の基本的な条件として必要なことだが、それを満たせば足りるということではあるまい。歌合の歌らしい佳作としては、あまり作者独自の斬新な着想などが際立って見えない、おおらかな詠み様をした歌がふさわしいと、俊成は考えていたのではないか。

この推測を裏付けられると思われる「歌合の歌」についての俊成の言葉を、近い時期の歌合の判詞から、歌とともに次に抄出しておく。

○名に高きをばすて山の月影も秋はことにぞ照りまさりける(永万二年『重家朝臣家歌合』月四番右、右京大夫)

ことにめづらしきところなけれど、歌合の歌と見えたり。

○大空も都のかたをしをのぶらしこよひはことにうちしぐれつつ(嘉応二年『住吉社歌合』旅宿時雨二十二番右、藤原実綱)

大空もとおけるより、都の方をしをのぶらしなどいへる姿、歌合の歌といひつべし。

○ゆふしでの風に乱るる音さえて庭白たへに雪ぞつもれる(承安二年『広田社歌合』社頭雪一番左、藤原公通)

風に乱るる音さえてなどいへる姿、歌合の歌とおぼえて、いとをかしこそ待るめれ。

以上、三番の俊成の判詞で注目されることのひとつとして、「歌合の

歌」という観点から批評していることに關して考えてみたのであるが、今一つ注目される点は、「関の岩かど」の語について清輔の見解を退けたかと思われることである。良暹が「関の岩かど」の「岩かど」を「岩門」と誤解したという話は、「注」で触れたように、清輔の『袋草紙』に記すところであるが、これは藤原高遠の歌、

相坂の関の岩かど踏みならし山たちいつる桐原の駒（『拾遺集』

一六九）

の場合、「岩かど」は「岩角」であるのを前提にした見解であろう。すると、当面の左歌で「岩門」を詠んだのまで清輔が否定したとなると、これは清輔の誤りに違いない。しかし俊成が高遠の「関の岩かど踏みならし」の歌について「岩角」「岩門」の両説があり決着していないかのように記すのは、いかがであろう。左歌の場合「岩門」を認める俊成の見解は正しいが、論の過程には問題があるかと思う。

四番

左勝

権大納言実房

7 きよみ潟せきにとまらで行く舟はあらしのさそふ木のはなりけり

右

三位中将実家

8 道もせに紅葉つもれば秋をさへとどめてみゆるあふさかの関

左の歌、心すがたいとどをかしく侍り。但、一葉のふねなどいふ、つねの事なれど、清見が関のあらきなきさにて、すぎん木の葉を舟とみむことやいかかと、うたがひ申し侍りしかども、げにあまのながせる舟かとぞみるなど、皆よむ事なれば、難には及ぶべからず。右歌も、心はをかしくみゆるを、相坂の関や秋とどむ事ばかりは、いづこの関にてもありぬべからんと思う給へて、すがたも猶左いとをかしく侍れば、勝とさだめをはりぬ。

【通釈】

四番

左勝

権大納言実房

7 清見潟を、関に止まらず行く舟（と見たの）は、あらしが誘って行く木の葉であったのだ。

右

三位中将実家

8 道も狭くなるほど、紅葉が散って積もったので、（過ぎゆく）秋まで止めたと思える、逢坂の関よ。

左の歌は、心も姿も、大層面白く思えます。ただし、「一葉の舟」などと言うのは通常のことだが、清見が関の荒い波打ち際で、通り過ぎて行く木の葉を舟と見るのはいかがであろうと、疑問視する意見もあったのですけれど、実際「白波に秋の木の葉の浮かべるを」あまのながせる舟かとぞ見る」など、一般に詠むことなので、非難には当たらないことです。右の歌も、着想は面白いと思われるが、逢坂の関で秋を止めたということに限れば、これはどこの関でもあり得ることであろうと思ひまして、歌の姿もやはり左の方が面白く思われますので、左の勝と判定しました。

【注】○きよみ潟 三番の「注」参照。○道もせに 道も狭くなるほど。○あふさかの関 三番の「注」参照。○一葉のふね 一枚の木の葉のような、一そうの小舟。『白氏文集』（卷十五）の詩句に「一葉舟中載二病身」とあるのが、『和漢朗詠集』四五六に収められている。○あまのながせる舟かとぞみる 「白なみに秋の木の葉のうかべるをあまのながせる舟かとぞ見る」（『古今集』三〇一、藤原興風。もと『寛平御時后宮歌合』九七に、第三句「うかべるは」の形で見える歌）。【考察】左の歌は、あらしの運んで行く木の葉を、清見潟で関に止まらず行く舟に見立てる趣向をとっている。このような見立ては、適当かどうか疑問もあるが、先例としては判詞に引かれている藤原興風の歌、

白波に秋の木の葉の浮かべるをあまの流せる舟かとぞ見る（『古今集』三〇一）
などが考えられる。

右の歌は、過ぎ行く秋の象徴として紅葉をとり上げ、その紅葉が関路に散り止まっていることから、逢坂の関は人を止めるばかりか行く秋まで止めたとの心を詠む。

俊成の判詞は、左右の歌について、問題点と思われるところと、一首全体の心姿の長所とを挙げて判定している。

問題点としては、左歌については、この場合木の葉を舟と見たのを疑問視する意見が出たことを挙げ、しかしこういう着想は一般に用いられるもので、非難するのは当たらないと言っている。右歌については、逢坂の関で行く秋を止めたと言っているが、これは逢坂の関以外のどの関でもあり得ることだろうと評している。

歌の心姿の長所に関しては、左歌の心姿を「いとをかし」と評価するが、右歌は心は「をかし」見えると評するにとどまる。これは左歌ののびやかに詠まれた姿に比べて、右歌の姿がそれに及ばないと見たものかと思われる。判定は左の勝である。

【備考】四番左歌は『千載集』（三六二）に収められている。

五番 左

左衛門督実国

9 音羽山ぬさと散りかふ紅葉ばを関もる神やわがものとみる

右勝

右京権大夫頼政朝臣

10 都にはまだあを葉にてみしかども紅葉ちりしく白川の関

左歌、おとは山ぬさと散りかふとおきて、関もる神やなどいへる心、いとをかしくはみゆるを、末の句やすこしいかがと申し侍りしにや。右歌、彼能因法師の秋風ぞふく白河のせきといへるをおきて、かやうによみいでん事ありがたくはみゆれど、但上の句のかすみと共にたちしかどといへるやうにはいかでかはとおもふ給へながら（群書類従）霞と共にたちしかどといへるには及びがたくやと思う給ふれど、紅葉ちりしきたりけん日数の程も心ほそく思ひやられて侍るうへに、人人もよろしきやうに侍りしかば、右をもちて勝とす。

【通釈】

五番 左

左衛門督実国

9 音羽山の、幣ぬささながらに乱れ散るもみじ葉を、（逢坂の）関の守り神は、自らへの供え物と見ることか。

右勝

右京権大夫頼政朝臣

10 都では、木はまだ青葉と見たのだけれど、この白河の関に来ると、紅葉が一面に散り敷いている。

左の歌は、「音羽山ぬさと散りかふ」と言っておいて、「関もる神や」などと詠んだ着想が、大層面白くは見えるけれど、末の句が少々どうかと思われるという意見があったかと思えます。右の歌は、あの能因法師が「（都をば霞とともに立ちしかど）秋風ぞ吹く白河の関」と詠んでいるのをさしおいて、このように今新しく詠んだのは、まことに立派なこととは思われるが、ただ上の句は「（都をば）霞とともに立ちしかど」と詠んだのは及び難いだろうかと思えますけれど、（青葉のころから）紅葉が散り敷く季節に至った（旅の）日数の長さも、心細いことと思いやられます上に、人々も結構な作と見る意向でしたから、右の歌を勝とした。

【注】○音羽山 今の京都市山科区と大津市との境にある山。昔、京都から東国・北国へ行く者は、山科からこの山を経て、北側の逢坂山へ出る道をとった。○ぬさ 幣ぬさ。神に祈る時の供え物で、絹・麻・木綿・紙などで作った。旅に出る時には、四角に細かく切ったぬさを、ぬさ袋に入れて持参し、安全を祈って道祖神の前にまき散らして手向けた。○白川の関 一番の「注」参照。○能因 俗名橘永愷なかつく。文章生

になったが、一〇一三年、二十六歳で出家、摂津の難波・毘陽ひやう・古曾部などに住み、奥州その他諸国の旅をする一方、歌を好み、歌人たちと幅広く交流した。私撰集『玄々集』、歌学書『能因歌枕』を残す。九八八—一〇五〇か一〇五一ごろ没か。○秋風ぞふく白河のせき 能因の歌「都をばかすみとともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」の下句。歌は『後拾遺集』（五一八）に収められ、詞書に「陸奥国にまかり下りけるに、白河の関にてよみ侍りける」とある。

【考察】左の歌は、音羽山に散り乱れる紅葉が、まき散らす「幣ぬさ」のように見えるところから、「関もる神」はそれを自分への供え物として見ることかと詠んでいる。「関もる神」は、逢坂の関の明神を言っ

たのであろう。紅葉を神にささげる幣に見立てる発想は、早く菅原道真の次の歌に見られる。

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに（『古今集』四二〇）

右の歌は、都では青葉の木と見たが、白河の関では紅葉が散り敷いていると詠み、都から白河の関までの長途の旅をして、それが半年に及んだことも表している。この発想は、能因の次の歌に基づくものであろう。

都をばかすみとともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関（『後拾遺集』五一八）

この能因の歌で、かすみと秋風とを対置したのを、頼政の右歌は、青葉と紅葉との対置に変えている。これによって能因の歌の「立つ」を掛詞にした趣向に代わり、頼政の歌は色彩上の工夫として、青葉と紅葉の色に、白河の名のもつ白も加え、新しい特色をもつ作に仕立てている。後年、芭蕉が『おくのほそ道』の白河の関の章に「秋風を耳に残し、もみぢをおもかげにして」と記したのも、二首それぞれの特長を認めたものであろう。

俊成の判詞は、左歌については、心が「いとをかしく」は見えるが、末の句は少々疑問が残るとする意見があったと記している。

右歌については、上の句は能因の歌に及び難いかと思うが、青葉のころ都を出て、紅葉の散り敷く白河の関に至ったという、その旅の日数も「心ほそく」思いやられ、衆議も「よろしき」ようであったとして、右の勝と判定している。

なお、この右歌については、作者の頼政が歌合に出すに当たって十分な自信がなく、俊恵に相談したところ、俊恵が勧めるので出すことにしたという経緯が、長明の『無名抄』に記されている。その要所を引くと、

其度此題の歌あまたよみて当日まで思ひ煩ひて、俊恵を呼びて見せられければ、「此歌は、かの能因が『秋風ぞ吹く白川の関』と

云ふ歌に似て侍り。されども是は出栄えすべき歌なり。彼の歌ならねど、かくもとりなしてむと、いしげによめるところ見えなれ。似たりとて難すべき様にはあらず」とはからひければ、（以下略。日本古典文学大系『歌論集』による）

とある。ここで俊恵が言ったという「出栄えすべき歌」とは、歌合の席に出すと見ばえがするはずの歌という意味と思われる。これはやはり一首の色彩の鮮明な特色に注目した上での俊恵の判断と見てよいであらう。

【備考】五番右歌は『千載集』（三六五）に収められている。

六番

左持

11 あらし吹く逢さか山の紅葉ばはちりつむ色ぞ関とみえける

左大弁実綱

右

右少将隆房

12 相坂の関の紅葉のから錦ちらすは袖にかさねましやは
左右の相坂の姿詞、共にをかしくはみゆるにとりて、左、関とみゆなどいふ事やちかく聞なれたる様ならむと申し侍りしかや。右は、ちらすは袖になどいへる、いとをかしく、あふ坂の関からにしきなど、ことにあひよれる事なからにとりては、またいづこにてもありぬべくやとて、持と申し侍りしなるべし。

【通釈】

六番

左持

左大弁実綱

11 あらしの吹く、逢坂山のもみじ葉は、その散って積もった色が（人を止める）関と見えた。

右

右少将隆房

12 相坂の関の紅葉の、織りなす（と見える）唐錦、これは紅葉が散らないと、袖に重ねることができない。

左右の逢坂の歌の姿、言葉は、ともに面白くは思われるが、それにつけて言えば、左の歌に関しては、「関と見ゆ」などということとは、近ごろ聞きなれた詠み様であらうとの意見もありましたか

と思います。右の歌に關しては、「散らずは袖に」などと詠んだのが、大層面白いと見えるが、逢坂の関と唐錦など、特に近い関係にないと思われる以上、またどこ（の関）でもよいことだろうかと見て、持としましたように思います。

【注】○逢さか山 逢坂山。三番の「注」参照。○から錦 唐錦からにしき。古代中国から渡来した錦。紅色のまじる美しい模様があるので、紅葉を形容して歌に詠まれることが多い。

【考察】左右の歌は、ともに逢坂山の関の辺りの紅葉を詠んでいるが、左の歌は「紅葉ばは散りつむ色ぞ関と見えける」と詠む。その心について、後年の例だが似た言葉をもつ次の歌など同様に見てよいかと思う。

おのづからをちこち人の立ちとまる関とぞ見ゆる秋の紅葉ば（建長三年九月『影供歌合』百五十一番左、藤原定雅）

もみじ葉はその色に引かれた人の足を止めるところから、人を止める関に見立てたと思われる。

右の歌は、紅葉を唐錦に例える通常の修辭を用いた上で、ただこの唐錦は紅葉なので、散らないと袖に重ねる衣にはなり得ないと言い、それを目新しい趣向にした作であろう。

俊成の判詞は、左右の歌の姿・言葉は「共にをかしく」は見えるとした上で、それぞれの問題点として、左は「関と見ゆ」などが「聞きなれたる」詠み様である点、右は「逢坂の関」が「唐錦」と特に密接な関係をもたない点が考えられるところから、持としたことを記している。

【備考】六番右歌は『続千載集』（六二〇）に収められている。

七番 左勝

13 もみぢ葉を関もる神に手向けおきて相坂山を過ぐる木がらし

右

右中将実守朝臣
右馬権守隆信

14 ふはの山紅葉ちりかふこずゑよりあらしおこさぬ関もりもがな

左歌、関もる神に手向けおきてなどいへる心姿、いとをかしくみゆ。右歌も、嵐おこさぬなどいへる心、よろしくはきこゆ。人人もさやうに侍りしを、紅葉既にちりかはんにとりては、あらしおこさでも何にかはと覚ゆるうへに、不破の山とおける初の句や心ゆかず思う給へば、左の勝とさだめ申し侍るなり。

【通釈】

七番 左勝

13 もみぢ葉を（幣ぬさとして）、関の守り神に供えておいて、相坂山おうさかを通り過ぎる木枯らしの風よ。

右

右馬権守隆信

14 不破の山の、紅葉の散り乱れるこずえから、山風が紅葉を誘ってくるのを、止める関守りがほしいものだ。

左の歌は、「関守る神に手向けおきて」などと詠んだ心や姿が、大層面白く思われる。右の歌も、「あらしおこさぬ」などと詠んだ心は、わるくないとは思われる。人々もそういう意見でしたが、紅葉がすでに散り乱れているという状態であれば、あらしが紅葉を送ってこなくても何の役にも立たないと思われる上に、「不破の山」と言った初めの句はどうも不満に思いますので、対する左の歌の勝と判定致した次第です。

【注】○相坂山 逢坂山。三番の「注」参照。○木がらし 木枯らし。木を枯らすものの意で、秋から冬にかけて吹く、強く冷たい風。これを冬の風とする見方に対して秋の風を詠んだ古歌が挙げられたことが、天禄三年『規子内親王家歌合』（虫のね）判詞に見え、これは『袋草紙』にも引用されているが、秋にも冬にも詠まれた。『千載集』では、この七番左歌は秋の部に収められるが、別の「こがらし」の歌（四一九）が冬の部に収められる。○ふはの山 「不破」は美濃みのの国の歌枕。今の岐阜県不破郡関ヶ原町に属する。古代、東山道で近江と美濃の境の要地として関が置かれた。『万葉集』には「不破山」（一九九）も「不破の関」（四三七三）も見えるが、平安時代は「不破の関」に比べて

「不破の山」が詠まれることは少なく、この用例あたりが古いものに属するようである。

【考察】左の歌は、「こがらし」を旅人のように擬人化してとらえ、木枯らしの風が逢坂山の紅葉を散らして吹き過ぎてゆく様子を、散り乱れる紅葉を幣ぬさとして関の明神に手向けて通り過ぎて行くと詠む。

右の歌は、「あらし」が、不破の山の木々の散る紅葉を運んでくると見て、それを止める関守りがいてほしいと詠む。散る紅葉を惜しむ心を、こういう趣向を設けて詠んだ作である。

俊成の判詞は、左歌については、「(もみち葉を) 関もる神に手向けおきて」などと詠んだ心と姿を、「いとをかし」と評価する。

右歌については、「嵐おこさぬ(関もりもがな)」などと詠んだ心を「よろしく」は見えると評価した上で、問題点を二つ挙げる。その第一は、紅葉がすでに「散りかふ」状態であれば、嵐が紅葉を運ぶのを止めても無意味と思われる点であり、第二は、「不破の山」の語を用いた点である。この第二の点は、「注」に触れたように、平安時代には「不破の関」は一般に詠まれるが、「不破の山」はあまり詠まれず、紅葉で知られることも少なかったためであろう。対する左歌の勝とされる。

【備考】七番左歌は『千載集』(三六二)に収められている。

八番 左

15 山おろしに紅葉しちれば清みがた錦をかくる浪の関もり

右勝

16 ちりかかる紅葉のにしきうはぎにて衣の関をすぐる旅人

左、清みがたとおき、錦をかくるといへる姿、宜しくみゆるを、右、もみちの錦うはぎにて衣の関をなどいへる心ばへなど、をかしく聞ゆれば、以_レ右為_レ勝。

【通釈】

八番 左

左少将修範朝臣

15 山おろしの風に紅葉が散ると、清見潟は、波の関守が錦をかけわたしたと見えた。

右勝

右少将通親朝臣

16 散りかかる紅葉を、錦にしきの上着のように身に着けて、衣の関を旅人が通り過ぎて行く。

左の歌は、「清見潟」と言って「錦をかくる」と詠んだ姿が、わるくないと見えるが、右の歌は、「紅葉の錦うはぎにて衣の関を」などと詠んだ心のはたらきなどが、面白く思われるので、右を勝とする。

【注】○清みがた 三番の「注」参照。○浪の関もり 二番の「注」参照。○衣の関 陸奥の歌枕。今の岩手県平泉町に置かれた衣川の関か。

【考察】左右の歌は、いずれも散った紅葉を錦に見立てて詠んでいるが、左の歌は、その紅葉の錦を清見潟に「浪の関もり」がかけわたしたものとして詠む。清見潟を前にした位置に清見が関があるところから、波を関守に見立てる趣向によっている。

右の歌は、衣の関を通して旅人に紅葉が散りかかって、錦の上着を着たと見えると詠む。そして錦の上着に縁のある「衣」の関の名を詠み入れている。

俊成の判詞は、左歌は姿が「宜しく」見えると評し、右歌は「心ばへ」などが「をかし」思われると評する。右の勝としたのは、錦の上着の印象が鮮明で、「衣の関」の名を生かした点を評価したのである。

九番 左持

盛方朝臣

17 みるからにとまらぬ人ぞなかりける散る紅葉ばや不破の関守

右

18 紅葉ばのみな紅に散りしけば名のみなりけるけり(群書類従)白河の関 勘解由次官親宗

左歌、姿ふるまひ、いと宜しくみゆ。ふはの関といへるや、殊に

よれる事なからんならん。右歌、名のみなりけり白川の関といへる心をかしくみゆるを、みな紅の詞、散りしけばとおけるや、すこし耳にとまるらんとおもう給へし上に、一番の右の歌、いくばくかはらずみゆるを、殊に宜しきよしひき申すもいかがとて、同じ程にやと定め侍りしを、猶思う給ふれば、白河の関はまさり侍りけるものをと思う給ふれども、姿詞猶なずらへて持と定め申しけるにや。

【通釈】

九番 左持

盛方朝臣

17 見るとともに、立ち止まらぬ人はなかったのだ、——散るもみじ葉は、(人を止める) 不破の関守ということか。

右

勘解由次官親宗

18 もみじ葉が、紅の一色に散り敷いたので、(白を名にもつ) 白河の関も、名ばかりのものになった。

左の歌は、その姿ないし詠み様が、大層結構に見える。ただ「不破の関」を詠んだのは、特に根拠としたことではないだろうと思う。

右の歌は、「名のみなりけり白河の関」と詠んだ心が面白く思われるが、「みな紅」の言葉に「散りしけば」と続けたのは、少々耳障りであろうかと思いました。それに、一番の右の歌は、この歌とさほど違わないものに見えるのに、この歌を特に結構なものとして採り上げるのもいかがなものかと思って、同じ程度の歌であるうかとまとめたのでした。しかしなお考えてみますと、この白河の関の歌の方がまさっているがと思ひましたのですけれども、歌の姿、言葉の面でやはり同列に置いて、持と判定した次第でしたかと思ひます。

【注】○からに ……と同時に。……や否や。○不破 七番の「注」

参照。○みな紅 みなぐれなる。すべて紅の色であること。○白河の関 一番の「注」参照。○よれる事ならん 意味不明。群書類従本等に「よれる事ならん」と見えるのに従い、より所にした事柄はないであろう、の意に解しておく。

【考察】左の歌は、散るもみじ葉は、見る人がみな心引かれて立ち止まるので、人を止める不破の関守とも言えようかと詠む。そういう見立てを趣向とする作であろう。

右の歌は、もみじ葉が紅一色に散り敷いたので、白河の関は白を名にもつが名ばかりのものになったと詠む。そういう色と名の不一致の面白さをねらった作であろう。その点でこれは一番右の俊成の歌、

色色の木の葉に路は埋もれて名をさへたどる白川の関

と着想の上で似たところがある。

俊成の判詞は、右歌について記した部分がかなり長いが目立つ。それは幾つかの文に分けられるところを一つの長い文で続けているが、右歌の長所短所、類似点のある一番右歌の場合と矛盾しない評価の問題などを含めて、あれこれと考えて判定した経緯を示している。そして右歌が「まさり侍りけるものを」と思ひながら、姿詞を考えて持と判定したというので、少々歯切れのわるい感じもするが、これは俊成が自作の一番右歌との関係を意識したことが影響しているのかもしれない。

【備考】九番右歌は『千載集』(三六四)に収められている。

十番

左勝

季 広

19 から錦たちかさねてもみゆるかな衣の関にちれる紅葉ば

右

仲 綱

20 あふさかの関の小川のいろづけば木ずゑさびしき音羽山かな

左、先の番の右歌にいくばくかはらざるべし。これもをかしくはきこゆ。右、落葉を詞にあらはさずして題をまはせる心、をかしくみゆれば、題の歌はまはさす文字の侍りけり。此題の落葉は、ただあらはによむべきなり。関の小河の色づき、おとは山のこずゑさびしからんばかりは、猶おぼつかなくやとて、左の勝とす。

【通釈】

十番

左勝

季 広

19 唐錦を、裁って重ねていると見える、——衣の関に散り敷いたもみじ葉は。

右

仲綱

20 逢坂の、関の小川が色づく、音羽山の木のこずえが、寂しく眺められる。

左の歌は、前の(八)番の右歌といくらも変わらぬ作と言えるであらう。これも面白いものと思われる。右の歌は、題の落葉を歌の言葉に出さずに、題を遠回しに表現した作意は、面白く思われるので、それにつけて言う、題詠は、「まはす文字」(遠回しに表わす文字)というものがありません。しかしこの場合の題である落葉は、専らはっきり詠み入れるべきものである。関の小川が色づく、音羽山のこずえが寂しいと言うだけでは、やはり題意がはっきりしない点があるかと思えて、対する左の歌の勝とする。

【注】○から錦 六番の「注」参照。○たちかかねて 裁ち重ねて。

○衣の関 八番の「注」参照。○あふさかの関の小川 「逢坂の関」は、三番の「注」参照。その「関の小川」は、近江の国の歌枕で、逢坂の関付近を流れた小川と思われ、「関の清水」と同じとも言われる。源俊頼の歌に「音羽山もみぢ散るらし逢坂の関のをがはに錦おりかく」(『金葉集』二四六)と詠まれている。○音羽山 五番の「注」参照。○題をまはせる心 題を遠回しに詠んだ作意。「題をまはす」とは、題の文字をそのまま歌に詠み入れるのでなく、題の文字の意味するところを遠回しに表現することを言う。これは題詠の場合の一つの心得として『俊頼髓脳』に記され、長明の『無名抄』でもそれを受けて述べている。なお「考察」で触れる。

【考察】左の歌は、衣の関に散り敷くもみじ葉は、唐錦を裁ち重ねたかと思えると詠む。紅葉を錦の衣服に例えて関の名の「衣」と縁をもたせた着想は、八番右の通親の歌、

ちりかかる紅葉の錦うはぎにて衣の関をすぎる旅人
と同様である。

右の歌は、逢坂の関の小川が色づく、音羽山の木のこずえが寂しく見えると詠む。これは俊頼の次の歌によった作であらう。

音羽山もみぢ散るらし逢坂の関の小川に錦おりかく(寛治三年『四条宮扇歌合』十一番左では五句「錦おりしく」、『散木奇歌集』五八五、『金葉集』二四六)

この俊頼の歌は、初出は歌合で、「紅葉」の題で詠まれたものだが、仲綱の右歌は、題の「落葉」、あるいはそれに相当する「紅葉」の語を用いず、紅葉を間接的に表わそうとした点に特色がある。俊成が判詞に言う「題をまはす」詠み様である。これは題詠の場合の一つの詠み様とされたもので、『俊頼髓脳』には次のように記されている。

おほかた歌を詠まむには、題をよく心得べきなり。題の文字は、三文字四文字五文字あるを限らず、詠むべき文字、必ずしも詠まざる文字、まはして心を詠むべき文字、ささへてあらはに詠むべき文字あることを、よく心得べきなり。心をまはして詠むべき文字を、あらはに詠みたるもわろし。ただあらはに詠むべき文字を、まはして詠みたるも、くだけてわろし。かやうのことは、習ひ伝ふべきにもあらず。ただわが心得てさとりべきなり。

これによれば、題詠の場合、題の文字には、「心をまはして詠むべき文字」と「ただあらはに詠むべき文字」があるとされる。ただその区別は作者自身がさとり外はないと言う。長明の『無名抄』も、この俊頼の説を受け継ぐが、例えば「暁天落花」「雲間郭公」「海上明月」などの題なら、それぞれの題の第二の文字「天」「間」「上」は「必ずしも詠まず」とする程度の具体例を挙げている。しかし題の中心となる事柄を示す文字については、触れていない。

それで仲綱の右歌が、題の「落葉」ないし「紅葉」の語を用いず、「題をまはす」詠み様を用いたことの可否が問題になるのだが、俊成の判詞は、「題をまはせる心」が「をかしく」思われると評しながらも、

此題の落葉は、ただあらはに詠むべきなり。

と言って否定している。歌合の歌は題の心を確かに表現すべきものとする原則を優先したのである。

水鳥近馴

一番 左持

按察使公通

21 なれにけりくだす筏のこすさをにたちもさわがぬ鴨の村鳥

右

皇太后宮大夫

22 きみが代をのどかなりとや水とりもたまの汀につばさしくらん

左歌、くだす筏のこすさをにといへる姿ことばいひしりてをかくこそみ侍れ。右歌は又、みづからのあやしの歌とみ侍りしかば、おして左の勝と申すべかりしを、人人、祝の心あり、勝つべしなど侍りしかば、さらば持などにてやと定め申し侍りにき。但、たまの池などいふ事こそあれ、汀やいかがいふ事の侍りしを、読人をかくされたるゆゑに、委しくもえ申さでやみ侍りしなり。瑠池玉砌などは詩にもつねの事なり。汀はやまと詞にて水のきわといふ事なれば、本文に及ぶべからず。又、玉といふことばは何をもほむる時の事なれば、只砌とても侍るべかりしかど、みぎりといひつれば詞もおとり、水もちかからむため、やまとごとにつきて、おまへの汀につばさをしかせて侍りし。かばかりなりし歌も、ことなる事なかりしを、祝に事よりて持にまかりなりしこそ、かたはらいたく侍りしか。

【通釈】

水鳥近馴

一番 左持

按察使公通

21 よく慣れたものだ、——川を下す筏の、瀬を越えるさおの動きに、立ちさわぎもしない鴨の群れは。

右

皇太后宮大夫

22 君のみ代を、のどかなものと思って、水鳥たちも、御前の美しい汀に羽を並べているのであろうか。

左の歌は、「くだす筏のこすさをに」と詠んだ姿、言葉が、詠み様を心得た風で面白いと思います。右の歌はまた、私の見苦しい歌と存じましたから、どうしても左の勝と申すべきところでしたが、人々が、（右の歌は）祝いの心がある、勝とすべきだなどと申しましたので、それなら持あたりにしよう決めました次第です。ただ、「玉の池」などと言うことはあるけれど、「（玉の）汀」はどうだろうかと疑問視する意見がありましたのを、作者の名を隠されていたために、詳しく私見を申し上げることができずに終ったのです。（それで私見をここに記すと、「瑠池」や「玉砌」などの言葉は漢詩で普通に使われている。しかし「汀」は大和言葉で、水の際ということなので、よるべき漢詩文の文句などに配慮する必要はない。また、「玉」という言葉は何に対してもほめる時に用いる言葉だから（よいとすると）、ただ「汀」は「砌」でもよかったのでしようが、「みぎり」と言うことと歌語としても劣るし、水も近く感じられるために、和語の言い様に従って、君の御前の池の汀に水鳥の羽を並べた様子に仕立てたに過ぎません。歌に格別の取り柄はなかったのに、祝いにかかわっている点で持とさせていただいたのは、気がひけることでした。

【注】○村鳥 群鳥。群がっている鳥。○きみが代 君のみ代。ここで「君」と言うのは、後白河天皇の女御から高倉天皇の母として皇太后になり、院号宣下のあった建春門院滋子である。この歌合を主催した人。一一四二—一一七六。○たまの汀 美しい水辺。「たまの」は、後の名詞の語を美しいものとしてほめる心を示す。○つばさしく鳥がつばさを一面に並べる様子を、庭に「玉敷く」という言い方に準じて表現したのであろう。○読人 詠み人。歌の作者。○瑠池「瑠」は、訓読「たま」。たまの池で、美しい池を言う。○玉砌「砌」は、訓読「みぎり」。玉の石だたみ。○本文 よりどころになる古書の文句。○砌 みぎり。「みぎり」は軒下などの雨滴を受ける石だたみを言うが、また水ぎわを言う場合もある。

【考察】左の歌は、鴨の群れが、筏のさおの動きに立ちさわぐでもない様子を、「なれにけり」と詠んでいる。「水鳥近馴」という題に即して素直に詠まれた作と見えるが、俊成が判詞に言うように、「くだす筏のこすさをに」あたりの表現は、平凡ではないように思う。

右の歌は、「君が代」を平穩なものと思つて、水鳥たちも「玉の汀につばさしく」と見えると詠む。「つばさしく」は、水鳥たちがつばさを一面に並べて憩う様子を、庭に「玉（を）敷く」という言い方に準じて表現したのであろう。歌合の主催者の建春門院のみ代を平穩なものとして祝福する心をこめた作と思われる。

俊成の判詞は、左歌についても一応評価の言葉を加えているが、大部分を自作の右歌に関することに充てている。右歌に関して記す主なことは内容上二つに分けられる。その一つは、右歌に祝の心があることを人々が認め、勝とすべきだと言ったのを考慮して、持と判定したことである。今一つは、右歌の「玉の汀」という言葉を疑問視する意見があったが、詩の「玉砌」などと違って「玉の汀」は和語だから詩の用例にとらわれる必要はなく、また「みぎり」としてもよいようだが、それは歌語として劣る点なども考慮して、御前の池の「みぎは」に水鳥がつばさを並べると詠んだということである。

なお、俊成の家集『長秋詠藻』（二六六）には、一首の第四句を「玉の砌に」とした形が見える。問題点として記しておく。

二番 左

前大納言実定

23 水とりにうきねの床をならぶればはなれもやらす立居鳴くなり

右勝

新三位重家

24 いけ水をやどの汀にたたへもて手がひにぞするあぢの村鳥

左歌、うきねの床をならぶればなどいへる姿、いひなれてよろしくはみゆ。右歌、たたへもてとおき、あぢのむらどりなどいへる詞、ことにえんにはみえねど、題の心まことに近くなれてきこゆ。人人もをかしき様に侍りしうへ、左のうきねの床も、ふねなどに

こそはとおしはかられ侍りながら、すこしおぼつかなくもやとおもう給へて、右の勝と定め侍りしにや。

【通釈】

二番 左

前大納言実定

23 水鳥に、浮き寝の床を並べると、鳥は離れもせず、波に揺られて高くなり低くなり、鳴いているようだ。

右勝

新三位重家

24 池の水を、家の水際まで満たしておいて、手元で飼ひ慣らししているのです。——鴨の群れを。

左の歌は、「浮きねの床をならぶれば」などと詠んだ姿が、詠み慣れた風で、結構には思われる。右の歌は、「たたへもて」と言い、「あぢのむら鳥」などと言った言葉の用い様は、あまり優美とは見えないけれど、題の心どおり、まことに水鳥が人に近く慣れたものに思われる。それで人々も面白いと見る様子でしたし、左の「浮き寝の床」というのも、人は舟などに乗っているのだからとは推量されますが、少々明確でない点もあるうかと思ひます。で、右の勝と判定しましたように思います。

【注】○うきね 浮き寝。水鳥が水に浮いたまま寝ること。また人が水上に舟をとめて夜を明かすことも言う。歌では「浮き」に「憂き」を掛けて詠まれることが多い。○立居 「立ち居る」の連用形として用いている。「立ち居る」は、波が高くなったり低くなったりする意味の用法があり、ここではその波に揺られて水鳥が上下する様子を言ったのであろう。○たたへもて この「もて」は、「もって」から出て接続助詞のように用いられる語。たたえることで。たたえて。○あぢの村鳥 「鵲」は鴨の一種で「ともえがも」の異名。「村鳥」は「群鳥」で、群がっている鳥。

【考察】左の歌は、水鳥に近く「浮き寝」をすると、水鳥は離れもせず波に揺られて鳴いているようだと言ひ。水鳥と「浮き寝の床」を並べるという着想に特色が見られ、水鳥に親しむ気持ちもうかがわれる

が、下句はまたそういう気持ちに基づいて水鳥の動きをよくとらえたところがあると思う。

右の歌は、池の水を家屋のそばまで引いて、鴨の群れを「手飼ひ」にする詠んでいる。曲のない詠み様のようだが、「水鳥近馴」という題の心は十二分に表わされている。

俊成の判詞は、その題意が明確に詠まれているか否かという観点を主として二首を比較し、右歌を勝としたことを記している。

三番

左持

藤大納言隆季

25 小舟を舟（群書類従）こぐ人のあたりになれにけりをしのうき寝も驚かぬまで

右

清輔朝臣

26 をし鳥のは風もちかくみなるはわがもとゆひの霜をはらふか

左、をしのうきねもおどろかぬまでといへる心すがた、をかしくみゆ。右は、もとゆひの霜心ぼそく、近くなれたる心などは侍るを、をしどりのかたへの鳥にはねをかはせる様なるや、無下にとりわけてきこゆらむなど、やうやうに人人侍りしも、すこしはさもある事と思う給へられし上に、霜はらふかといへるをはりの詞、やまと歌ともおぼえざらん。左歌も句のはじめとをし鳥のその字（群書類従）左歌、句の初とののをの字、いかがとおもう給へて、持としをはりぬ。なほ持とす（群書類従）

【通釈】

三番

左持

藤大納言隆季

25 小舟をこぐ人のあたりに、よく慣れたものだ、——浮き寝をするおしどりが、目覚めることもないまでに。

右

清輔朝臣

26 おしどりが、羽風も近く慣れ親しむのは、わたしの元結の辺りの霜を払うのであろうか。

左の歌は、「をしの浮き寝もおどろかぬまで」と詠んだ心と姿が、面白く見える。右の歌は、元結の辺りの霜が心細く思われ、水鳥が身近に慣れている心などは認められるのですが、おしどりが番

いの鳥と羽を重ねた時の様子のように見え、この点がひどく目立っているだろうかなどと、いろいろ人々が申しましたのも、少しはもっともなことと思われました上に、「霜をはらふか」と言った末尾の言葉は、和歌の言葉とも思われぬものであろう。（しかし）左の歌も、句の初めの「を」の文字が（「小舟こぐ」と「をしのうき寝も」と重なって）どうかと思ひまして、持とした次第です。

【注】○をし おしどり。鴨に似てやや小形の水鳥。雌雄が離れず仲のよい鳥とされた。○みなる 「見慣る」は、（いつも見て）慣れ親しむ意であるが、同音の「水慣る」から「をし鳥」と縁語になる。○もとゆひの霜 「元結」は、束ねた髪をまとめ結ぶ紐の類。「霜」は、ここでは白髪を例えたのであろう。平兼盛の歌に「暮れてゆく秋のかたみに置く物はわがもとゆひの霜にぞありける」（『拾遺集』二二四）と見える。○かたへの鳥 番いになっている一方の鳥。○句の初とののをの字…… この辺りの本文、誤記があるらしいが、「初との」を「初の」と見れば一応意味は通じるので、「通釈」はそれによった。

【考察】左右ともに、題の「水鳥」をおしどりとして詠んでいるが、左の歌は、浮き寝をするおしどりが舟をこいでも目覚めぬほど人に慣れた由を、平明に詠む。対する右の歌は、おしどりが羽風も近く慣れて見えるのは、わが元結の白髪の霜を払うのかと、これは多少趣向を設けて詠んでいるようである。

俊成の判詞は、左歌についても一応批評の言葉を記しているが、大部分を右歌の批評、特に問題点の指摘に充てている。これは右歌の作者が清輔であることを意識したためであらうか。問題点とするところは二つで、その一つは、おしどりが番いの鳥と羽をかわした様子がひどく目立って見える点である。ただこれは人々の指摘で、俊成としては、この指摘も少しは理由があると思うと、控え目な言い方をしている。今一つの問題点は、歌の末尾を「霜をはらふか」と詠んでいる点で、これは和歌の詠み様とも思われないと、強く批判している。言葉

遣いが漢詩めいて硬いのを指摘したものであろう。

ただし判定に際しては、左歌も問題があると言ひ、持とする。左歌の問題点としては、「句の初め」の「をの字」を挙げているらしく、これは初句「小舟せこぐ」と四句「をしのうき寝も」の一字目の「を」が重なるのが、歌病の一つの文字病に当たる点を指摘したものである。この文字病の類は『俊頼髓脳』などにも挙げられているが、俊成は後年その無意味なことを記すに至る。しかしこの歌合では、なお歌病に関する通説によって問題視したのであろう。

四番

左

権大納言実房

27 舟ふねこぐともろにも猶おどろかてつなでをぐる鴨鴨の村どり

右勝

三位中将実家

28 汀ていにてをしのはぶきをうつからに上毛うはげの霜しもを袖そでにかけつる

左歌、つなでをぐるなどいへる心姿をかし。右歌、うはげの霜を袖にかけつるといへる詞づかひ又えんに侍れば、持などにやといみじく思ひ煩ひ侍りしを、すこしの事をも勝負あるべき様にのみ侍れば、左は心はいとをかくみゆるを、ともろにもといへるわたりや、すこしいかにぞ思ふ給へて、をしの羽ぶきを勝とさだめ侍りしなり。

【通釈】

四番

左

権大納言実房

27 小舟こふねをこぐこ櫓こ、その動きも氣にかけず、鴨鴨の群ぐんれは、舟ふねの引き綱こをくぐって行く。

右勝

三位中将実家

28 水ぎわで、おしどりが羽ばたきをして、羽はの上の霜しもを、(わたしの)袖そでにかけたのです。

左の歌は、「綱手こをくぐる」などと詠んだ心や姿が面白い。また右の歌は、「上毛うはげの霜しもを袖そでにかけつる」と詠んだ言葉遣いが優美ですから、持などにすべきだろうかと非常に悩みましたけれど、

少しのことでも勝負をつけるようにと専ら求められましたので、(あえて申せば)左の歌は心は大層面白く思われるのですが、「ともろにも」と詠んだあたりが、少々どうかと思ひまして、右の「をしの羽ぶき」の歌の方を勝と判定しましたのです。

【注】○ともろ 櫓こ。船尾にある櫓。○つなで 綱手。船につないで引く綱。○村どり 群鳥むら。群がっている鳥。○はぶきをうつ 羽ばたきをする。○からに 接続助詞。この場合、上記のことが原因で、下記のことかただちに生じることを示す用法。○上毛うはげの霜しも 「上毛」は、鳥の表面の羽毛。「上毛の霜」は、寒い夜に水鳥の羽の上におく霜として歌に詠まれた。「うちらはふ共寝ならねばをしどりのうは毛の霜もけさはさながら」(『和泉式部集』六四四、『新撰朗詠集』三四九)など。

【考察】左の歌は、鴨の群れが、動く舟の前後を無心に移動する様子を詠んでいる。素直な詠み方と見えるが、鴨の生態を日ごろよく観察した目が生かされていると思う。

右の歌は、おしどりが羽ばたきをして、その羽の上においた霜を袖にかけた由を詠む。おしどりの瞬時の動きをとらえた形になっているが、「注」で触れたように水鳥の「上毛の霜」を詠む着想上の伝統があるのを受け、おしどりが羽ばたいて「上毛の霜」を近くに自分の袖にかけたと、題意に合わせて趣向した作であろう。

俊成の判詞は、左歌は鴨の群れが「綱手こをくぐる」などと詠んだ心姿が面白く、右歌はおしどりが「上毛の霜を袖にかけつる」と詠んだ言葉遣いが「艶」に思われて、勝負をつけ難いと思ったけれども、しいて差をつければ、左の歌は「ともろにも」と詠んだあたりが少し弱点であろうかと言ひ、対する右の歌の勝と判定している。「ともろにも」という言葉が声調上耳ざわりな点を指摘したのであろう。

五番

左

左衛門督実国

29 こやの池の玉もかるをにみなれてやをしの毛衣立ちもはなれぬ

右勝

右京権大夫頼政朝臣

30 子を思ふ鳩のうきすのゆられきて捨てじとすれやみがくれもせぬ
左歌、詞つづきいとをかしく侍り。をしの毛衣は、古歌合に、（群書類従）鳩の毛衣とこそいへ、鴛にはよまずと難じたる事なりと申す人侍りしかど、其詞ふるく鳩の毛衣としふともといふ歌を読みおきたるにこそあれ、おほ方鳥は毛衣をする物なれば、彼文選の鸚鵡賦にも、みどりの衣青衣の領などこそ作りつれ。又、文にかもめを作るには、（群書類従）毛衣といへり。又、衾の中にも鴛鴦の衾といふこともあれば、をしの毛衣とよめらむ、更にとがあらじとぞ思つたまへて、毛衣におきては難あるまじきよし申し侍りにき。右歌、鳩のうきすのゆられきてといへるけしき、ことわりなくもとめいでて、めづらしくみゆる。子を思ふとおける五文字も、あはれに聞え侍りしかば、以_レ右勝としをはりぬ。

【通釈】

左

左衛門督実国

28 昆陽の池の、藻をかる男に慣れてのことか、羽の衣のおしどりが、そこを離れもせずにいる。

右勝

右京権大夫頼政朝臣

30 わが子を思ふ鳩鳥、その浮き巢が波に揺られてきたが、巢のひなを見捨てまいとするのか、（親鳥は）水に隠れもしない。

左の歌は、言葉の続き様が大層面白く思います。「をしの毛衣」については、古い歌合に、「鳩の毛衣」とは言っても、おしどりに「毛衣」と詠まないと非難したことだと言う人がありました。が、その言葉は、昔「鳩の毛衣年経とも」と詠んだ先例があるのは間違いないけれども、一般に鳥は毛衣を身に着けるものだから、あの『文選』の「鸚鵡賦」にも、「みどりの衣、青衣の領」などと詠んだのだ。また詩文でかもめを言うのにも、「毛衣」と言っている。また衾にしても「鴛鴦の衾」ということもあるので、「をしの毛衣」と詠んでいても、決して過ちではあるまいと思ひ

まして、（おしどりについて）「毛衣」と詠んだ点に関しては非難すべきではなからうという旨を申した次第です。右の歌は、「鳩の浮巢のゆられきて」と詠んだ様子が、理屈抜きでよく情景をとらえていて、目新しく思われる。「子を思ふ」と言った初句も、心を動かされましたので、右の歌を勝としました。

【注】○こやの池 昆陽の池 摂津の国の歌枕。今の兵庫県伊丹市昆陽にある池。奈良時代に行基が作ったと伝えられる。歌では「昆陽」は「来や」などと掛けて用いられることが多い。○玉もかるを 玉藻かる男。「玉藻」の「玉」は美称。○みなれてや 「見慣る」は、いつも見て慣れ親しむ意であるが、同音の「水慣る」（水に浸り慣れる意）を掛けて「をしの毛衣」と縁をもたせたものであろう。○をしの毛衣 おしどりの毛衣。「毛衣」は鳥の羽毛を、人の衣服のように鳥のからだを包むものと見て言う。○鳩のうきす 「鳩」は、水鳥のカイツブリの古名。小形の水鳥で、巧みに潜水する。その巢は葦の間などに作られ、水上に浮いて見えるところから「浮巢」と言われる。○みがくれ 水隠れ。水中に隠れること。○鶴の毛衣としふともといふ歌 赤染衛門の歌「雲の上にのぼらんまでも見てしがな鶴の毛衣としふとならば」（『赤染衛門集』五七四。『後拾遺集』四三八の詞書には「匡房朝臣うまれて侍りけるに産衣ぬひてつかはすとてよめる」と見える）。○文選の鸚鵡賦 『文選』は、梁の昭明太子撰、周から梁に至る約千年間の詩文を文体別、時代順に並べた書。三十卷。六世紀前半に成立。「鸚鵡賦」は、後漢末の人、禰衡、字は正平（一七三—一九八）の作。○みどりの衣青衣の領 「鸚鵡賦」に「緑衣翠衿」とある。緑の羽、青緑色の首の回りの意。○文にかもめを作るには、毛衣といへり 典拠未詳。○鴛鴦の衾 「鴛」は雄の、「鴦」は雌のおしどり。「衾」は夜着。おしどりの雄と雌が仲良く共寝すると見ることから、仲むつまじい男女が共寝をする夜着の意で用いられる。

【考察】左の歌は、池の藻を刈る男に親しむかと思えて、おしどりがそこを離れない情景を詠んでいるが、歌枕の「昆陽の池」をとり入れ、

「をしの毛衣」の語を用い、全体に優雅な言葉を連ねて、ゆるやかな声調美をもつ一首に仕立てている。

右の歌は、「鳩の浮巢」が波に揺られてきたが、親鳥は巢のひなを思うせいか、水にもぐり身を隠すことをしないと詠む。「鳩の浮巢」が波に揺られてくると詠んだ点については、後で触れるように実態に合わない指摘する意見があるが、鳩のよく潜水する習性と結びつけて「子を思ふ」親鳥の心をとらえた点に、特色が見られると思う。この「鳩の浮巢」のとらえ様は、実態に合わないと祐盛法師が指摘したことが、長明の『無名抄』に、次のように記されている。

此歌めづらしとて勝ちにき。祐盛法師、是を見て大きに難じて云、「鳩の浮巢の様を知られぬにこそ。彼の浮巢はゆられありくべき物にあらず。海のしほは満ち干るものなれば、それを知りて、鳩の巢をくふには、蘆あしのくきを中にこめて、しかもかれをばくつろげてめぐりにくひたれば、潮満しほちては上へあがり、潮のひればしたがひてくだるなり。ひとへにゆられありか人には、風吹かばいづくともなくゆられ出て、大浪にもくだかれ、人にも取られぬべし。されども、其座に知れる人のなかりけるにこそ勝に定められなければ、いふかひなし」とぞ申し侍りし。

しかし、顕昭の『袖中抄』(第十三)では、「にほのうきす」の項に、前記の祐盛と同じ見方を十郎藏人行家の説として挙げる一方、次のようにも記している。

此鳥の巢は波の上に作りおきてあだなれば、波のひくにしたがひてゆられありくといふ人もあり。されば頼政卿もにほの浮巢のゆられきてと詠めり。此義につくべし。まさしく池などに有るは、あちこちくひもてありくと人々も申せり。

これによれば、鳩の浮巢に関する祐盛の説は、定説とは言えないことになる。

俊成の判詞は、左歌については、言葉続きを「いとをかし」と評価し、「をしの毛衣」の語を非難する意見があったのを不適当として

退けている。しかし右歌については、「めづらしく」また「あはれに」思われると言い、より高く評価したようで、右の勝とする。

六番 左勝 左大弁実綱

31 舟とむる入江にすだく鴨かもどりはおなじ汀にうきねをぞする

右 右少将隆房朝臣

32 岸ちかみあしまの水にうきねして手がひになづくをしのかもどり
左右ともにをかしうきねを、おなじうきねにとりて、左、舟のあるにつきて、すこしまさるべくやとて、左を勝とす。

【通釈】 六番 左勝 左大弁実綱

31 舟を泊める入江、そこに集まる鴨かもたちは、舟の者と同じ汀に、(同じように)浮き寝をすることだ。

右 右少将隆房朝臣
32 岸が近いので、蘆あしの間の水に浮き寝をして、人の飼うのに慣れ親しんでいる、おしどりよ。

左右の歌は、ともに面白くは見えるが、同じ浮き寝の様子を詠んでいるにつけて、左は舟を詠み入れているところから、少し勝るであろうかと考えて、左の歌を勝とする。

【注】○すだく 群がり集まる。○うきね 二番の「注」参照。○なづく 慣れ親しむ。○をしのかもどり オシドリのこと。オシドリをカモの種類として言う。

【考察】左右の歌は、いずれも鴨かもなどの「浮き寝」を詠み入れているが、左の歌は「舟とむる入江に」とあり、人も舟を入江に泊めて「浮き寝」をするのであろう。『万葉集』の長歌(三六四九)に「明石の浦に船泊めて 浮き寝をしつつ」とあるような情景と思われる。それで鴨と人は同じ入江で、ともに浮き寝をする、きわめて近い状況でとらえられている。

右の歌は、おしどりが岸近く浮き寝をして、人の「手がひ」に慣れ

親しんでいと詠む。題の「水鳥近馴」を端的に表現した作である。俊成の判詞は、左右ともに「をかしく」は見えるが、「浮き寝」の詠み様に關して、左歌の方が「舟のある」だけに少し勝るかとしている。同じく水鳥の浮き寝を詠んでいても、左歌は舟を詠み入れることで人の浮き寝も表現した工夫があるのを認め、その点で少し勝るかと見たものであろう。

七番

左

右中将実守朝臣

33 高せ舟おなじ葦まにとまる夜はつがはぬをしも友ねをぞする

右勝

右馬権頭隆信

34 すみななる手がひのをしやはならん立ちぬるむれにたたぬつがひは左歌、心詞をかしくみゆ。右も姿すがたこころはよろしきへだててをかしきを、立ちぬるむれにといへるや、むれゐるとりのとも、むれたつたづのともこそいへ、むれとただつがひたることば聞きつかず侍りしかど、鴛の立ちぬる中に、立たぬつがひの有りけむ心、よろしき様にきこえ侍りしかば、右の勝にやと定め侍りしなり。

【通釈】

七番

左

右中将実守朝臣

33 高瀬舟が、同じ葦あしの茂みの中に泊る夜は、番つがいでないおしどりも、共寝をするというものだ。

右勝

右馬権頭隆信

34 ここに住み慣れた、手飼いのおしどりがこれだろうか、——鳥の群れが飛び立っても、立ちもせぬ番いの鳥は。

左の歌は、心も言葉も面白く思われる。右の歌も、姿や心は結構（すがたこころはよく）に思うのだが、「立ちぬるむれに」と詠んでいるのは、「むれゐる鳥の」とも「むれたつたづの」とも詠むけれども、「むれ」とただ「つがひ」であるという言葉で表現したのは、聞き慣れない気がしましたが、おしどりたちが飛び立った中に、立たぬ番いがあったという着想は、結構なように思われましたので、右の勝である

うかと判定した次第です。

【注】○高せ舟 高瀬舟。「高瀬」は川の浅い所で、浅瀬の多い川むきに造られた小舟。○姿こころへだててをかしきを この本文は理解し難い。群書類従本等に「すがたこころはよろしきを」とあるのによつて「通釈」を記しておいた。

【考察】左右の歌は、いずれも水鳥として「をし」を詠み入れているが、左の歌は「番はぬをし」で、高瀬舟の葦間に泊る夜は、それが「共寝」をすることになると詠む。前の六番左歌と似た情景と見られる。右の歌は、鳥の群れが飛び立っても立たぬ「番ひ」の鳥は、ここに住み慣れた手飼いにする「をし」なのだろうと推測する心を詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については心言葉が「をかしく」見えると言い、右歌については姿心が「よろしき」とするようだが、結局右の勝とする。ただ右歌は問題点があるとして、「立ちぬるむれに」あたりの表現を挙げている。この部分の本文は多少分かりにくいとも見えるが、「むれゐる鳥の」とか「むれたつたづの」とかの表現を通常のものとして挙げていることから見て、ここで「鳥」とも「をし」とも言わずに「立ちゐるむれに立たぬつがひは」と詠んだのを、「聞きつかず」と批判したのであろう。しかし大きな欠点とは見ず、その着想を主として評価し、勝としている。

八番

左持

左少将修範朝臣

35 たかせ舟のぼる汀にゐる鴨はこすつなでもさわがざりけり

右

右少将通親朝臣

36 めなれてやかものうきねのおどろかぬ葦うきねもまを分けて舟は過ぐれど左、こすつなでもといへる姿も、右の鴨のうきねの驚かぬといひて、あしさをわけてなどいへる心ことば、共にをかしく侍れば、為持。

【通釈】

八番 左持

左少将修範朝臣

35 高瀬舟が上る川の、汀にいる鴨は、引き綱が上を越えても、さわぐ気配も見せなかった。

右

右少将通親朝臣

36 見慣れているのか、鴨は浮き寝のまま、目覚める様子もない、——葦の間を分けて舟は通り過ぎるが。

左の歌で、「越す綱手にも（さわがざりけり）」と詠んだ姿も、右の歌で「鴨の浮き寝のおどろかぬ」と言って「葦間を分けて（舟は過ぐれど）」などと詠んだ心言葉も、共に面白いと思いますので、持とする。

【注】○たかせ舟 七番の「注」参照。○つなで 綱手。舟をつないで引く綱。川舟が川を上る時、舟につけて陸上から引いた。

【考察】左右の歌は、いずれも鴨が舟の動きに動じない様子を詠む。左の歌は、汀の鴨が高瀬舟の引き綱の動きに平気でいる有様をとらえ、右の歌は、浮き寝をする鴨が、葦間を分けて舟が進むのに目覚める様子もないと詠んでいる。

俊成の判詞は、左右の歌がそれぞれ情景を具体的に表した点を認めたようで、共に「をかしく」見えると評し、持としている。

九番

左持

盛方朝臣

37 なみ枕うきねの床に立ちよれば袖をぞかはす鴛の毛衣

右

勘解由次官親宗

38 池水をおのがつばさにうち立ててむれる鳥に手がひをぞする

左、袖をぞかはすなどいへる姿、よろしくはみゆるを、これもうきねの床やすしおぼつかなき様ならむ。毛衣の詞、さきに申しをかりぬ。右、おのが羽さきにうちたててなど、げにさる事とをかしきこえながら、又さすがにことなるよせなきやうにやとて、又為持。

【通釈】

九番 左持

盛方朝臣

37 波を枕に浮き寝をする、その床に立ち寄ると、おしどりの番いが、羽の衣を敷き交わしていた。

右

勘解由次官親宗

38 池の水を、そのつばさで波立たせて、たくさん群がっている鳥に、餌をやって手元で飼うのです。

左の歌は、「袖をぞかはす」などと詠んだ姿が、結構には見えるのだが、これも（二番左歌の場合と同様）「うき寝の床」というのが少々明確でないところがあるう。「毛衣」の言葉については、先に（五番の判詞で）私見を申しておいた。右の歌は、「（池水を）おのが羽さきにうち立てて」などと詠んだのは、まことにそういう事があると面白く思われる一方、またやはり特別な縁語なども見えない詠み様であるうかと考えて、これも持とする。

【注】○なみ枕 水上に寝るのを、波を枕にすると見立てて言う語。○袖をぞかはす 「袖交はす」は、男女が互いに衣の袖を敷きかわして寝ること。○鴛の毛衣 五番の「注」参照。○よせ 寄せ。言葉に縁があること。縁語関係。建久六年『民部卿家歌合』深雪二番左歌「雲わけし谷の木末も降る雪のそこのみなる天のかご山」に対する俊成の判詞には、「雲分けしとおき、天のかご山といへる、よせ有りて聞ゆるを」と言う。

【考察】左の歌は、波を枕の「浮き寝の床」に立ち寄ると、雌雄のおしどりが仲むつまじく「毛衣」の袖を敷き交わしていたと詠む。「毛衣」の語が「袖を交はす」と言うのにふさわしく用いられ、また全体に優雅な言葉を連ね、美しい声調をもつ一首に仕立てられている。ただ俊成が判詞に指摘するように、「浮き寝の床」の实体は、判然としないところがある。それに対して右の歌は即物的な詠み様で、池水をつばさで波立たせて群がる水鳥を手飼いにすると詠む。

俊成の判詞は、左歌については、下句あたりの姿を「よろしく」見
えると評しているが、これは先に触れたように、「袖をぞ交はす」と
言うのにふさわしく「毛衣」の語を用いた点などを認めたものである
う。ただ「浮き寝の床」の語は、二番左歌の場合と同様、ここでも疑
問視している。なお「毛衣」の語に関して「さきに申しをはりぬ」と
言っているのは、五番の判詞で、鳥は毛衣を身に着けるのだから「を
しの毛衣」と言って差支えない旨を述べたことを指している。
右歌については、「池水をおのがつばさにうち立てて」などと詠ん
だ点を、水鳥の動きをよくとらえた表現として評価する。けれどもさ
すがに特別な縁語などは見られないと言ったのは、左歌の「袖」に
「毛衣」を関連させた技巧と比べる意識によるものであるう。そうい
う比較に基づいて、持としている。

十番 左

39 日をへつつなれにけらしなあし鴨は上毛の霜をはらふばかりに（群書類従）季 広

右勝

隠岐守仲綱

40 杣川のいかだになるる鴛どりはたちてもさきに遠くやはある

左歌もことなるとがなくみゆれど、右の杣川の筏になるるなどい（群書類従）

ひて、立ちてもさきにとほくやはあるといへる心、げにさこそい（群書類従）
とをかしきこゆれば、以_レ右為_レ勝

【通釈】

十番 左

季 広

39 日がたつにつれて、鴨はすっかり慣れたらしい、——近くで羽の上
の霜を払うほどに。（はらふばかりにノ本文ニヨル）

右勝

隠岐守仲綱

40 杣川のいかだに慣れたおしどりは、飛び立っても、先に遠く離れて
身を置きはしない。（そまがわ）

左の歌も目立った欠点はないと見えるが、右の歌で「杣川のいか
だになるる」おしどりなどと言って、それが「立ちても先に遠く

やはある」と詠んだ心は、実際そのとおりだろうと大層面白く思
われるので、右の歌を勝とする。

【注】○あし鴨 カモのこと。葦の生えているあたりに見られる鴨と
して言う。○上毛の霜 四番の「注」参照。○はらふばかりか 群書
類従本等の「はらふばかりに」の本文により解しておく。○杣川 杣
山（材木を切り出す山）の木を流して運ぶ川。

【考察】左の歌は、「上毛の霜をはらふばかりに」の本文によれば、そ
の程度に鴨が慣れたらしいと詠んだのであろう。「上毛の霜」は、四
番の「注」などでも触れたが、水鳥の羽の上に寒夜おく霜とされ、四
番右歌では次のように詠まれていた。

汀にてをしのはぶきをうつからに上毛の霜を袖にかけつる

これは水鳥が羽ばたきをして「上毛の霜」を「袖にかけつる」という
ので、鳥が人に慣れて、すぐそばまで寄って来ている様子を詠んだも
のと見られる。当面の左歌では、鴨が人に近づいていることを直接示
す言葉はないが、やはりこの四番右歌の場合と同様、鴨が人に慣れて
近い位置で「上毛の霜を払ふ」動作をする情景かと思われる。

右の歌は、杣川を下すいかだに慣れたおしどりが、いったん飛び立っ
ても、いかだに先だって遠く行くことはないと言わねば。平明な詠み様だ
が、いかだに慣れたおしどりの動きをよくとらえた作であろう。

俊成の判詞も、その点を右歌の特長と認めているようで、左歌も目
立った欠点はないと見ながらも、右の勝としている。

臨期違約恋

一番 左

按察使公通

41 あはじともかねていひせば中中にむなしき床にまたでねなまし

右勝

皇后宮大夫

42 思ひきやしぢのはしがききつめても夜もおなじまるねせんとは
左歌、むなしき床になどいへるわたり、心ぼそくもきこえて、い
とをかしと思う給へしを、右歌、すがたことざまよろしきよし、

人人定め侍りしかば、おさへ侍らんも又あやしくやとて、右の勝になりにしなるべし。

【通釈】

臨期違約恋

一番 左

按察使公通

41 会うまいと、前に言ってくれたら、なまじひとり寝の床で待ったりせず、寝てしまっただろうに。

右勝

皇后宮大夫

42 思いもしなかった、——夜ごとに榻の端に訪ねたしるしを書き、合せて百夜になるまで、いつも同じ丸寝をしようとは。

左の歌は、「むなしき床に」などと詠んだあたりが、心細くも思われて、大層面白く思いましたが、右の歌は、その姿や事の様子が結構に思われると、人々が決めたものですから、それを強いて抑えるのも不都合であろうかということで、右の勝になったように思います。

【注】○むなしき床 愛人のいない寝床。○しぢのはしがき 「榻」は、

牛車で牛を外した時に車の轆を支えたり、乗降の折に踏み台にしたりするもの。その「端書き」は、その端に書き付けること。昔、女が言い寄る男に対して、百夜通って榻に寝たなら承知しようと言ったので、男はそれに従い、来るたびに榻の端に証拠を書きつけ、九十九夜に及んだが、百夜目に支障があつて行けず、思いを果たせなかったという言い伝えによる。この話は『奥義抄』に見える。「考察」参照。○かきつめて 書き集めて。○まろね 丸寝。帯もとかず着物を着たまま寝ること。

【考察】左の歌は、会はずの時に姿を見せなかった恋の相手に対して、会うつもりがなければ前にそう言ってくれたら、ひとり寝の床で待つこともなかったのにと、恨む心である。題意に沿う飾らぬ詠み様であろう。

右の歌は、「榻の端書き」について伝えた話をとり入れ、百夜通い

にいどんだ男の心で詠まれている。この「榻の端書き」の話は、清輔の『奥義抄』（下、七十二）では、関係する歌の心を説明する形で、次のように記されている。

暁のしぢのはしがきも、よかききみがこぬよはわれぞかずかく問云、このしぢのはしがきはいかなることぞ。

答云、如^二彼歌論議^一ば、むかしあやくなる女をよばふをとこありけり。志あるよしをいひければ、女心みむとて、きつゝ物いひけるところにしぢをたてゝ、これがうへにしきりて百夜ふしたらむ時、いはむことはきかむといひければ、をとこ雨風をしのぎてくるればきつゝふせりけり。しぢのはしにぬる夜の数をかきけるをみれば、九十九夜に成りけり。あすよりは何事もえいなびたまはじなどいひかへりにけるに、親の俄にうせにければその夜えいかず成りにけるに、女のみてやりける歌也。是は或秘藏の書にいへりとはべれど、たしかにみえたることなし（『日本歌学大系』第一巻による）。

ちなみに、この記事に見える「しぢのはしがき」の歌は、顕昭の『袖中抄』（第十八）に言うとおり、次のような『古今集』の歌に基づいており、その歌に関する話とともに後に作り出されたものであろう。

暁のしぢの羽がき百羽がき君がこぬ夜は我ぞかずかく（七六一）
ともかく、右歌は、この「榻の端書き」の歌に関する話をとり入れることで、歌合の題の心を間接的に生かして、一首に仕立てたと思われる。

俊成の判詞は、この右歌が俊成自身の作であるだけに、対する左歌の長所も認めた上で、判定は自分の意見でなく、人々が右歌の「姿ことぎまよろしき」由を言うのに従って、右歌を勝とすることになったと記す。ただ俊成の本心は、この右歌を後に『千載集』に収めているから、自信のある作だったと思われる。

【備考】一番右歌は『千載集』（七七九）に収められている。

二番 左持

前大納言実定

43 契りきなみちしばの露分けよとてまきの戸よりはかへすべしやは
右 新三位重家

44 たのめつるけふを待つだに有りつるをこはいかにする心がはりぞ
左歌、すがた詞えむに侍るを、道しばの露分けよとはとよみあげ
侍りしかば、槇の戸よりはのはの字どもやとまらむと申し侍りし
なり。右の歌の詞をいたはらず、題をことわりてはみえ侍れども、
歌のしなかつたむ事はいかがとて、為_レ持。

【通釈】

二番 左持

前大納言実定

43 約束したよね。——それなのに道の芝草の露を分けて帰れと、板戸
から入れずに帰してよいものか。

右

新三位重家

44 頼みに思わせた今日を待つ、それだけでも耐え難い気がしたのに、
これは一体どうした心変わりなのだ。

左の歌は、姿言葉が優美に思われますが、「道芝の露分けよとは」
と講師が読み上げたものですから、「まきの戸よりは」の「は」
の字との重複が耳障りであろうかと申した次第です。右の歌は、
言葉に細工を加えず、題の心をよく理解して詠んでいるとは見え
ますけれども、歌の品格の上で勝るとするのは疑問があると思う
ので、持としたのである。

【注】○契りきな「契る_{ちぎ}」は約束する意。約束したね。○みちしば
道に生えている芝草。○まきの戸 真木_{まき}の戸。スギやヒノキなどで造っ
た板戸。○たのめつる この「たのむ」は下二段活用の動詞で、あて
にさせる、頼みに思わせる意。○えむ 艶_{えみ}。優美あるいは優雅を基調
として独特の魅力をもつ美を言う語。○歌の詞をいたはらず 歌の言
葉に手を加えず。表現上あれこれと細工をしないことを言う。○題を
ことわりて 題の意味するところを理解して。

【考察】左の歌は、まず「契りきな」と言って、愛を誓い合った仲で

あることを相手に念を押す詠み様が目立つが、その先例となる有名な
歌に、次の清原元輔の一首がある。

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波こさじとは（『後拾
遺集』七七〇）

この元輔の歌は詞書に「心かはりて侍りける女に、人に代りて」と見
え、当面の歌合の題の「臨期違約恋」とも通じるところがあるから、
とり入れて背景としたのであろう。また左歌の第二句以下に見える
「道芝の露」とか「まきの戸」とかは、恋の行き来に心を悩ます歌に
用いられてきた言葉で、例えば、

きえかへりあるかなきかのわが身かなうらみてかへる道芝の露
（『小大君集』六二、『新古今集』一一八八、藤原朝光）

きみやこむ我や行かむのいさよひにまきの板戸もささずねにけり
（『古今集』六九〇、よみ人しらず）

などと詠まれている。左歌はそういう言葉をあれこれ適切に織りこむ
ことで、歌に表現される世界を豊かにしようとしたところがあるよう
に思う。

対する右の歌は、約束した今日を待つだけでもつらい思いをしたの
に、今日の変心はどうしたことかと、恋の相手を恨む心を素直に詠ん
でいる。題の「臨期違約恋」の心を明確に表わした歌であることは間
違ひなからう。

俊成の判詞は、左歌については、姿言葉が「艶」であると評した上
で、歌合の披露の折に講師が歌を誤読した問題に触れている。これは
「道芝の露分けよとて」を「道芝の露分けよとは」と講師が誤読した
形によって、俊成は「は」の字が「まきの戸よりは」の「は」と重な
り、歌病の文字病に当たる旨を指摘したというのである。俊成として
は、講師の誤読のために左歌を誤解して批評したこと、その結果低く
評価したことを気に懸けて釈明したものであろう。

右歌については、言葉は修辭上の細工などせず、心は題意を理解し
ていると見えるが、歌の「しな」の面で勝と評価するのは疑問がある

ために、持としたと言う。恋の相手の心変わりを恨む心の詠み様が露骨になり過ぎて、品位に欠けると見たのであろうと思う。

三番

左

藤大納言隆季

45 ながれきていはりのうち（群書類従）による舟の（岩ものうち）のねたくも浪にさかのぼるかな

右勝

清輔朝臣

46 神かけていひし契を引きかふるいつきの杣の夕ぐれの空

左歌、姿詞かかる方の歌にとりてはをかしく侍るを、いはり（群書類従）のうち何事にかと驚く人も侍りき。誠に古歌などにはみえ及び侍らず。右歌、姿宜しくはきこゆるを、夕ぐれの空とてはてたるや、すそのとぢめなき心ちすらんとは思ふ給へながら、又いひすてたる姿さてもありぬべくやとて、右の勝になり侍りしなり（群書類従）。

【通釈】

三番

左

藤大納言隆季

45 流れてきて、いはりの中に寄った魚が、くやしいことに、波を分けてさかのぼってゆく。

右勝

清輔朝臣

46 神かけて誓った約束とは、打って変わって、近寄り難く見えた、杣の杣山の上の、夕暮れの空そのままに。

左の歌は、その姿や言葉が、こういう恋の方面を詠む歌としては面白いのですが、「いはりのうち」とは何事だろうか、意外に思う人もありました。まことにこれは、古歌などには見られない言葉です。右の歌は、姿は結構には思われるけれど、「夕暮れの空」と言って終わっている点、歌の末尾が十分言い尽くされていない感じがするだろうとは思いましたが、またこのように言い捨てた姿も、そうあるべきものかと考えて、右の勝ということにした次第です。

【注】〇いはり 『平安朝歌合大成』では「堰張り」と漢字を当てられるが、「堰」の仮名表記は本来「ゐ」でもあり、他に用例も見いだせ

ないので、疑問が残る。ただ魚をとる「やな」のような仕掛けを示す可能性はあろうかと思う。群書類従本は「岩も」とする。〇いつきの杣「いつき」は、神を祭ること、またその場所。「杣」は、材木を切り出すような、樹木の茂る山。神聖な杣山。

【考察】左の歌は、歌全体が比喻と見られる。いったん手の届く所まで流れ着いた魚が、くやしいことに流れをさかのぼって去ったと言、この例えて、接近した恋の相手が変わ心して離れたことを表わし、題の「臨期違約恋」に合うように仕立てた作であろう。

右の歌は、上句に神かけて誓った恋の相手が変わ心したことを言い、その様子を下句に「いつきの杣の夕暮れの空」と表現したと見られる。この下句は、相手の取り付く島もない様子を示していると思う。なお一首は、『実方朝臣集』に見える次の歌を念頭に置いたものであろう。

神のもるいつきの杣に立たねどもいたづらになるくれをいかにせん（書陵部蔵『実方朝臣集』八六）

俊成の判詞は、左歌については、この種の歌としては「をかしく」も思われるが、「いはりのうち」は古歌などにも見えない言葉だと言、問題視する。右歌については、「姿宜しく」は思われるとする一方、「夕暮の空」は歌の結びの形としてどうかと疑問視したが、またこのように「言ひ捨てたる姿」も適当かもしれないと思い直し、右の勝にしたと言う。

四番

左

権大納言実房

47 今やさはきえもはてなむ露の命たのめし事言の葉（群書類従）のはにぞかかりし

右勝

三位中将実家

48 わびつつは偽にだにたのめよとおもひし事を今夜しりぬる
此左右は、共にをかしきこえ侍るを、右の歌の心さもある事とおぼえ侍りしかば、いますこしの事をもて、右勝としをはりぬ。

【通釈】

四番

左

権大納言実房

47 今はもう、露のような私の命は、消え果てる外はないでしょう。

——その命は、約束された言葉に頼って保たれたのだから。

右勝

三位中将実家

48 嘆きながら、うそでも約束してくれと思ったものだが、そのとおり
の（偽りの）約束だったことを、こよい思い知りました。

この左右の歌は、いずれも面白く思われたのですが、特に右の歌
の心がもっともなことを思われましたので、ごくわずかな差で右
の勝としました。

【注】○たのめし事は「たのめし」は、頼みに思わせたの意。「事
のは」は、群書類従本等の「言の葉」の形が主な意味を示すと思われ
る。○わびつつは 嘆きを重ねながら。○偽にだに いつはりにだに。
うそでもよいから。

【考察】左の歌は、自分の「露の命」はもう「消え」はてる外はなか
ろう、それは約束された「言の葉」に頼って保たれた命だからと詠み、
約束の破られたのを嘆いている。修辞上は「露」「消え」「言の葉」を
縁語とする。

右の歌は、以前かなわぬ恋を嘆きながら、うそでも約束してくれと
願ったが、今その願いどおり偽りの約束だったと思ひ知らされたと詠
む。皮肉な恋の成り行きをとらえた点を見どころにした作である。

俊成の判詞は、左右ともに「をかしく」思われるが、右の歌の心が
「さもある事」と思われる点で、わずかに勝るとする。

【備考】四番右歌は『玉葉集』（一三九五）に第五句「こよひこりぬる」
の形で収められている。

五番 左持

49 さよ衣きて重ねよとちぎりしをかへしてはさは夢に見せばや
かへしてもさは夢に見よとや（群書類従）

右

50 いかにかさは下ものひばをときかけて思ひかへすは又むすびぬる
こは（群書類従）

左歌、ゆめにみよとやなどいへるすゑの句、いとをかしく侍りき。

右歌、期にのぞむ心ぞあまりさへ近づきてきこえ侍りしを、人人
もをかしき様に侍りしうへに、ときかけてなどいへることばづか
ひも、げにをかしくやと思う給へ、ややもせば右の勝になりぬべ
く侍りしを、左かたなかばほころびあらはれて、持にさだむべき
よしこそ、いとをかしく興ありてこそ侍りしか。
（群書類従） 静にみ給ふれば、
（群書類従） 歌のしな誠に左の勝とも申すべく侍りけれど、
（群書類従） 持とみえたること
の侍るなり。

【通釈】

五番 左持

左衛門督実国

49 夜の衣を、来て重ねよと（わたしに）約束したが、入れずに帰して、
（さは夢に見よとや／本文ニヨル） そのように夢に見よというのだろうか。

右

右京権大夫頼政朝臣

50 どうしてそのように、いったん下裳したものひもを解きかけて、思い直し
てまた結んでしまうのか。

左の歌は、「夢に見よとや」などと詠んだ末の句が、大層面白い
と思いました。右の歌は、題の「期にのぞむ」心が、あまりにも
時機に近く詠まれていると思われましたが、人々も面白いように
申しましたし、「（下裳のひばを）解きかけて」などと詠んだ言葉
遣いも、まことに面白からうかと思われまして、ともすれば右の
勝になりそうな形勢でしたが、左方の人が半ば笑みを浮かべて、
持と判定するのがよいと申しましたのは、大層面白く興を誘うこ
とでした。冷静に見ますと、歌の品位の点でまことに左の勝とも
申すべきでしたけれど、なお持と見られるところがあると思うの
です。

【注】○さよ衣きて重ねよ 「さよ衣」は、夜着。「きて」は「着て」
と「来て」とが考えられるが、一首の構成上からは後の「かへして」
に対応する「来て」を主な意味とし、「着て」は「かへして」ととも
に「さよ衣」の縁語として生かしたものと考えたい。○さは夢に見せ
ばや 「さは」は、そのように。夜の衣を重ねるといふように。「夢に

見せばや」は、判詞や群書類従本等に見える「夢に見よとや」の形によつて解したい。○下も 下裳^{したも}。昔の女性の衣服で腰から下にまとう「裳」の中で、下に着ける裳。○ひぼ 「ひも」(紐)の変化した語。○なかばほころびあらはれて 動詞「ほころぶ」は、笑いだす意味の用法があるので、この場合の「ほころび」も笑う様子を示すと見たい。半ば笑みを浮かべた様子で。

【考察】左の歌の「きて」は、「注」で触れたように「来て」の意味を主とし、同音の「着て」で「さよ衣」と縁語関係を作ると見たい。それで一首の心は、あなたはわたしに、来て夜の衣を重ねよと約束したのに、入れず帰すのは、夜の共寝を夢に見よというのかと、恋の相手を恨む気持であろう。

右の歌は、どうしてそう、下裳の紐を解きかけて、思い直してまた結ぶのかと、いざという時に生じた相手の態度の変化をとらえている。これはすこぶる即物的なとらえ方で、優雅な趣など顧慮しないと見え、異色の作である。作者の源頼政は平安朝伝統の詠み様も一応心得た歌人と見られるので、この詠み様は場を考えて興を添えるためにとられたものかと思う。

俊成の判詞は、歌合の場でこの左右の歌が評価された様子を伝えている。右歌の勝になりそうな形勢も見えたところで、左方の人が「なかばほころびあらはれて」というのは、頼政の右歌が予想外の異色の作だったために、こういう歌を出されてはと半ば苦笑の体で、というところであろうか) 持とするのがよいと言ったというので、俊成はこのことを「いとをかしく興ありて」という風に記している。

左歌の平安朝の伝統に沿った詠み様に対して、頼政の右歌はそういう詠み様を捨てて、即物的に詠むことに徹しているように見える。とすればこの二首を同列に並べて優劣を定めるのは公式的に過ぎるので、持とするのが妥当だろうというのが、左方の人の見解であり、俊成もそれに同感するところがあつたのではないか。俊成は判詞の最後に、歌の「しな」、品格の点では左が勝るとも言えるが、やはり持と見ら

れる点があることを言い添えている。

六番 左勝 左大弁実綱

51 何せむにその偽をたのみつつつらさをそふる今日を待ちけん
右 右少将隆房朝臣

52 いかなれば人をみぎはによすれども岸うつ波の立ちかへるらん
左、すゑの句いとをかしきこゆ。右、人をみぎはにとおきて、きしうつ浪のといへる姿ことば、又をかしくはみゆるを、約そくをたがふる心や、左は今すこしまさるらんとて、猶勝とす。

【通釈】 六番 左勝 左大弁実綱

51 一体どうして、人の偽りの約束を頼りに思つて、そのつれなさを加える今日まで待ったのであらうか。

右 右少将隆房朝臣
52 どうして、わたしを身に近づけた人なのに、岸を打つ波が寄せては返るように、そこから空しく帰ることになるのだらうか。

左の歌は、下の句が大層面白く思われる。右の歌は、「人をみぎはに」と言つておいて、「岸打つ波の」と詠んだ姿や言葉が、これも面白くは見えるが、約束をたがえる(という題の)心が、左歌の方が今少し勝るだらうかと思われるので、やはり左を勝とす。

【注】○何せむに どうしての意で、後の「……待ちけん」までの全体にかかる。○みぎはによすれども 「みぎは」は「身際^{みぎは}」で、身の近くの意があるうが、また「汀^{みぎは}」として「寄す」や「岸うつ波」「立ちかへる」などの語と縁をもち、比喩的表現の一部とも言える。「寄す」は、近づける意。

【考察】左右の歌は、「何せむに」や「いかなれば」の言葉で始まり、いずれも恋の相手がいったんは好意を示すと見えたが退けられる結果になつて、一体どうしたことかと嘆く形で詠まれている。

ただ二首を比べると、それぞれ特色があり、修辭の面では、右歌は、「汀」「寄す」や「岸うつ波」「立ちかへる」など、水・岸・波などに縁のある語を並べ、比喩としても用いた点が目立っている。それに對して左歌は、そういう修辭の方面の技巧を用いず、恋の相手の「偽りを頼みつつ」過ごして「つらさをそふる今日」に及んだことを顧みている。

俊成の判詞は、左右の歌のいずれにも「をかしく」見えるところがあるが、評するが、約束をたがえるという題の心がより確かに詠まれている点で、左を勝とする。

七番

左勝
53 つひに又かくかはるともわびつつは契りし程のことのはもがな
右 右中将実守朝臣
右馬権頭隆信

54 たのめつつあはぬためしはいつもあれどけふの暮までさや契りつる
左歌、ちぎりし程のこの葉もがなといへる、さりと聞えてすがたよろしくみゆ。右歌、上の句のあはぬためしはよにもあれどなといへる、よろしくきこゆるを、末のさや契りつるといへる程、はの字あらまほしきにや。かくては、さやつかのまになどよそふ猶をりこそとおぼえ侍りしかば、左を勝としをはりぬ

〔異同〕この判詞で右歌に関する部分は、群書類従本の本文ではかなり大きく異なるので、次にまとめて挙げておく。

右の上句、あはぬためしは世にもあれどなどいへるは、よろしく見ゆるを、末のさやちぎりつるといへるほどは、よせある字のあらまほしきにや。かくいへばさやつかのまになどよそふること日ごろおほく侍る。左の勝とす。

【通釈】

七番 左勝

52 最後にはまた、今のように変わるにせよ、空しく約束したところの、あの言葉が聞きたいものだ。

右

右馬権頭隆信

54 頼りに思わせておいて会わない、そんな例はよくあるけれど、この今日の暮れまで、そのように約束したことか。

左の歌は、「契りしほどの言の葉もがな」と詠んでいるのが、なるほどと思われる、歌の姿が結構に見える。

右の歌の上の句に、「あはぬためしは世にもあれど」などと詠んでいるのは、結構に見えるのだが、末の句に「さや契りつる」と詠んだあたりは、縁語などがほしいところかと思う。このように詠む場合、「さやつかの間に」など、縁をもたせることが、このごろも多く見られます。左の勝とする。

【注】○けふの暮 「暮」は、恋する相手を訪れ、男女が会う時刻であった。○よせある字 「よせ」は「寄せ」で、縁。縁のある文字。縁語。

○さやつかのまに 源俊頼の歌に「なきかげにかけける太刀もあるものをさやつかのまに忘れはてける」(『散木奇歌集』一三四三、『金葉集』五七五)と詠まれる。この歌は、『金葉集』の詞書には「経信卿が具して筑紫にまかりたりけるに、肥後守盛房、太刀のある見せんと申して音もせざりければ、いかにとおどろかしたりければ、忘れたるやうに申したりければよめる」とあり、呉の季札の剣を好んだ徐君の死後その墓に剣を懸けたという『史記』の故事を取り入れた作で、「さやつかのまに」は「鞘」と「柄」を掛けて「太刀」の縁語に仕立てている。

【考察】この歌合の伝本は、『平安朝歌合大成』によると甲本乙本の二系統に分けられ、それぞれ特色をもつとされるが、この七番では両者の相違が特に甚だしい。そして、ここで底本とする甲本系統の幽斎書写本では、判詞後半に意味の通じ難い部分が多い。それでその部分については乙本系統の群書類従本の本文によって「通釈」を記した。

左の歌は、約束がまた破られるにしても、前に約束したところの言葉がまた聞きたい旨を詠む。恋に夢中になっている者の心理の一面をよくとらえた作であろう。

右の歌は、頼りにさせておいて会わない例はよくあるが、会うはずの今日の暮れまで、そう思っで約束したかと恨む心なのであろう。

俊成の判詞は、左歌については、下句に見える心が納得できると言い、歌の姿を「よろしく」思われると評価している。

右歌については、上句の表現は「よろしく」見えるとするが、下句に不満をもっているようである。ただこの下句に対する判詞は、先に触れたとおり、甲本系統の幽斎書写本は意味の通じ難い部分が多いため、乙本系統の群書類従本の本文によって見たが、それによると縁語の工夫などがほしい旨を言っていると思われる。

八番

左持

55 あすか川淵瀬にあらぬななかなれど（群書類従）昨日たのめて今日ばかりぬ

右

56 今しばし空だのめにもなぐなぐさまで（群書類従）思ひたえぬるよひの玉章

左、あすか川によせて昨日たのめてなどいへる心すがたをかしくきこゆるを、右、空だのめにもなぐなぐさまでとおきて（群書類従）思ひたえぬるよひの玉づさといへる末の句、ことによりしく侍るなり。但、左も上下あひかなひたり。よりて持とす。

【通釈】

八番

左持

55 飛鳥川あすかの淵瀬と違つて、変わらぬ仲なかなれど（本文ニヨル）と思つたが（あの人）昨日頼みに思わせておいて、今日は冷たく変わってしまった。

右

右少将通親朝臣

56 もう少ししたら行くという、空頼めの文に心を慰めて待ち、結局あきらめることになった、その宵の文（の恨めしさ）よ。

左の歌は、飛鳥川に寄せて「昨日たのめて」などと詠んだ心と姿が、面白く思われるが、右の歌は、「空だのめにもなぐさめて」と言つて、「思ひたえぬるよひの玉づさ」と詠んだ下の句が、特に結構だと思うのです。しかし、左の歌も上下の句がよく適合し

ている。そのため持とする。

【注】○あすか川 飛鳥川。大和の国の歌枕。今の奈良県高市郡明日香村を流れ、大和川に注ぐ。『古今集』の「世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる」（九三三、よみ人しらず）などから、淵瀬の変わりやすい例、さらに人の世の変わりやすい例とされた。また「明日」を掛けて「昨日」「今日」と縁をもたせて詠まれることも多い。○ながれなれど 群書類従本等に「なかなれど」とあり、これによって、仲であるがの意に解したい。○空だのめ 頼みにならないことを頼みに思わせること。○なぐさめて 『平安朝歌合大成』や『新編国歌大観』では「なぐさめで」と読まれる。また群書類従本等では「なぐさまで」の形だが、『新日本古典文学大系』や『和泉古典叢書』所収の『千載和歌集』（七七七）の歌形と読みに従い、「なぐさめて」として「通釈」のように一応解しておく。○思ひたえぬる あきらめた。○玉章 たまづさ。手紙。便り。

【考察】左の歌は、『古今集』の「あすか川」に関する歌、

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる（九三三）

などの影響を受け、あすか川の淵瀬の変わりやすさをとり入れ、また「あす」「きのふ」「けふ」を縁語として詠んだと思われる。それで、あすか川の淵瀬と異なり、変わることはない仲と思つたが、恋の相手は昨日頼みに思わせておいて、今日は態度が変わつたと、題の「臨期違約恋」に合う歌に仕立てている。

右の歌は、女の立場で詠んだ作と思われる。今しばらくしたら行くという男からの空頼めの文に、心を慰めて待ったあげく、あきらめる結果に終わったことを嘆く作意と見ておく。かなり多くの事柄を定型に盛りこもうとしたために、文脈がたどりにくい部分を生じているように思う。

『八代集抄』では、一首の第三句を「慰めで」として、次のように注している。

日比は来んといひ、今宵と成て変改の玉章をこせし心也。空頼めながら、今迄実と思ひて慰めしに、今しばし慰めもせで、うき変改の文哉との心なるべし。

俊成の判詞は、左右の歌がともに上下の句のよく相応じている点を挙げて、持としている。

【備考】八番右歌は『千載集』（七七七）に収められている。

九番 左勝

57 そま河のあさからずこそ契りし（群書類従）になど此暮を引きたがふらん 盛方朝臣

右

58 かへりぬと（群書類従）今になりてはなにかいはむ思ひ定めてたのめましければ 親宗

左、すがた詞はをかしきを、（群書類従） 杣川のこの暮などやいひながしたる事ならむと申し侍りしにや。（群書類従） 右歌、すゑの句はをかしきこゆ。上の句やいかにぞ思ふ給ふる。（群書類従） 左のそま川さすがにさして其歌とはなけれども、猶ゆゑあるにやとて勝つべきにやと申し侍りしにや。

【通釈】

九番 左勝

盛方朝臣

57 杣川（そま）の（浅くない）ように、浅くない約束をしたのに、どうしてこの夕暮れの会う約束を破るのであろうか。

右

親宗

58 帰って行けと、今になっては、どうして言ってよかろうか、——心を決めて、頼りに思わせたのなら。

左の歌は、姿や言葉は面白く思われるが、「杣川」の縁で「この暮れ（樽）」などと言うのは言い古された表現だろうと申しましたかと思ひます。右の歌は、下の句は面白く思われる。が、上の句はどうかと思ひます。左の杣川の歌も、さすがに特によい歌といふほどのことはないが、やはり風情がありそうなので勝るとすべきかと申しましたように思ひます。

【注】○そま河 杣川（そま）。山から切り出した材木を流し下す川。この場合「そま川の」は、後の「浅からず」を導く枕詞のように用いられている。○暮 暮れ。同音の「樽」（くれ）（皮のついたまの材木）から「そま川」の縁語になる。○引きたがふ 約束を破る。相手の心を裏切る。「引き」は「そま」の縁語とも見られる。○かへりぬ 「ぬ」は助動詞「ぬ」の命令形。

【考察】この九番の本文は、前の七番の場合と同様、甲本系と乙本系で異なる部分が多い。けれども右歌の第一句の「かへりぬ」（甲本）と「かへりぬ」（乙本）との相違、また判詞前半の「いひながしたる」（甲本）と「いひならはしたる」（乙本）との相違の二点を別にすれば、意味の上では大差がないように思われる。そしてその相違する二点については、文脈上「かへりぬ」（甲本）、「いひならはしたる」（乙本）が妥当かと思えるので、その見方によって「通釈」を記した。

左の歌は、浅からず契ったのに、この夕暮に会う約束をどうして破るのかと詠む。修辭技巧としては、「そま河の」を「浅からず」の枕詞のように用い、また「そま河」の縁語として「暮れ」（樽）などの語を用いたと見られる。

右の歌は、会わず帰れと今になって言ってよいものか、すでに心を決めて頼りに思わせたのならば、と相手の変心を嘆く心であらう。これは左歌のような修辭技巧を用いず、より端的な詠み様である。

俊成の判詞は、左歌については、姿言葉の「をかしき」ことを認めるが、「そま河」と「暮れ」（樽）の縁語仕立ては詠み古された趣向であると指摘している。

右歌については、下の句は「をかしく」思われるが、上の句はいかなものかと批判している。これは、上の句があまりにも端的な詠み様で、風情に乏しいという批判であらう。そして、そういう視点から左の勝としているようである。

【備考】九番左歌は『千載集』（七七八）に収められている。

十番 左持

季 広

59 てる月のおぼろけならず契りしは空だのめともけふこそはしれ

右

仲 綱

60 此くれとたのめしいもが玉章のめじばかりこそ今もかはらね

左歌、すがた詞おもしろく、歌合の歌といひつべし。右歌、心い
とをかし。文字ばかりこそ今もかはらねといへる、いまも詞尤も
よろしくきこゆ。但、かれ是を通はしなぞらへて、持としをはり
ぬ。

【通釈】

十番 左持

季 広

59 並々でなく確かに（会うことを）約束したのだが、あれは空頼めだつ
たと、今日は思い知ったのです。

右

仲 綱

60 この夕暮れに会うと、頼りに思わせた彼女の、その手紙の文字ばか
りが、今も変わらず残っているのです。

左の歌は、姿や言葉が面白く、歌合の歌にふさわしい作と言える
であろう。右の歌は、心が大層面白い。「文字ばかりこそ今もか
はらね」と詠んでいる、その「今も」の言葉がいかに結構に思
われる。ただし、左右の歌をあえて並べて置いてみて、持と判定
した。

【注】〇てる月のおぼろけならず 「てる月」を枕詞風に前に置き、

「おぼろけならず」（並々でなく、の意）と言っている。一体「おぼろ
けなり」は、程度が普通であることを表わすのに対して、「おぼろげ
なり」は、月がぼんやり見える様子を表わし、両者は別の言葉である
が、形が似ているところから、和歌では両者を関連させて言うことが
行われた。『源氏物語』花宴の巻にも「深き夜のあはれを知るも入る
月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ」の一首が見える。〇空だのめ 語
意は八番の「注」参照。ここでは「月」の縁語。〇いも 女性を親し
みの心で言う語。ここでは恋の相手の女性。〇歌合の歌 歌合の場に

ふさわしい歌。関路落葉三番の「考察」参照。

【考察】左の歌は、並々でない堅い約束をしたと思ったが、空頼めだつ
たと（約束の破られた）今日思い知ったとの心である。初句の「てる
月のは」「おぼろけならず」に枕詞風に冠した修飾語だが、下句の
「空だのめ」と縁語関係で生かされ、また一首のおおらかな声調を導
いているところもあるかと思う。

右の歌も同様の内容だが、これはこの暮れに会うと約束した手紙の
文字だけが今も変わらないと詠み、それによって手紙の主の態度が今
は変わったことを表わす。そういう発想の面白さに特長のある作であ
ろう。

俊成の判詞は、左歌については、まず姿言葉が「おもしろく」と言
う。これは先に触れたような「てる月のは」「空だのめ」に対応させ
た点などを言ったのであろう。また「歌合の歌」にふさわしいとも評
する。「歌合の歌」に関しては、関路落葉三番のところで考えておい
たが、左歌の場合もおおらかな詠み様に注目したところがあるよう
に思う。

右歌については、「心いとをかし」と言う。その発想の面白さに注
目した批評であろう。

〇作者一覧。アラビア数字は、作者の歌の見える番数を示す。

。作者名に付した傍線は、『住吉社歌合』の作者でもある
ことを示す。

1 公通 きんみち 藤原公通。権中納言通季の子。正二位按察使権大
納言に至る。一一一七—一一七三。

1 俊成 としなり
しゅんせい 藤原俊成。権中納言俊忠の子。早く葉室顕頼の養
子になり、名を顕広と言ったが、のち本流に復して俊成と改名。

正三位非参議皇太后宮大夫に至る。一一七六年出家、法名は釈阿。
多くの歌合の判者を務め、歌壇の指導者として認められた。『千
載集』を撰進。家集『長秋詠藻』、歌学書『古来風体抄』等を残

す。一一一四—一二〇四。

2 実定 さねさだ 藤原（徳大寺）実定。父は右大臣公能^{きんよし}、母は俊成の姉。正二位左大臣に至る。家集『林下集』。一一三九—一一九一。

2 重家 しげいえ 藤原重家。左京大夫顕輔の子。兄弟に清輔、季経がいる。非参議従三位太宰大式に至る。家集『重家集』。一一二八—一一八〇。

3 隆季 たかすえ 藤原隆季。中納家成の子で、顕季の曾孫。正二位権大納言に至る。一一二七—一一八五。

3 清輔 きよすけ 藤原清輔。左京大夫顕輔の子。官位に恵まれず、正四位下、太皇太后宮大進に終わるが、六条藤家の歌字を大成、『奥義抄』『袋草紙』等を残す。家集『清輔集』。一一〇四—一一七七。

4 実房 さねふさ 藤原実房。内大臣公教の子。正二位左大臣に至る。一一四七—一二二五。

4 実家 さねいえ 藤原実家。右大臣公能の子。実定の弟。正二位大納言に至る。家集『実家集』。一二四五—一九三。

5 実国 さねくに 藤原実国。内大臣公教の子。正二位権大納言に至る。家集『実国集』。一一四〇—一一八三。

5 頼政 よりまさ 源頼政。兵庫頭仲正の子。従三位に至る。武将として以仁王を奉じ平家と戦い、敗れて宇治で自害。歌林苑の会衆。家集『源三位頼政集』。一一〇四—一一八〇。

6 実綱 さねつな 藤原実綱。右大臣公教の子。正三位権中納言に至る。一一二六—一一八〇。

6 隆房 たかふさ 藤原隆房。権大納言隆季の子。正二位権大納言に至る。家集『隆房集』。一一四八—一二〇九。

7 実守 さねもり 藤原実守。右大臣公能の子。実定、実家の弟。従二位権中納言になる。一一四七—一一八五。

7 隆信 たかのぶ 藤原隆信。皇后宮少進為経（寂超）の子。母の美

福門院加賀はのち俊成と再婚。右京権大夫などになる。似絵^{にせえ}の名手でもあった。家集『隆信集』。一一四二—一二〇五。

8 修範 ながのり 藤原修範。少納言通憲（信西）の子。正三位左京大夫に至る。一一四三—一一八三没か。

8 通親 みちちか 源通親。内大臣雅通の子。正二位内大臣に至る。『高倉院嚴島御幸記』等の作も残す。一一四九—一二〇二。

9 盛方 もりかた 藤原盛方。中納言顕時の子。中宮大進、出羽守になる。歌林苑の会衆。一一三七—一一七八。

9 親宗 ちかむね 平親宗。贈左大臣時信の子。建春門院滋子の異母弟。正二位中納言に至る。家集『親宗集』。一一四四—一一九九。

10 季広 すえひろ 源季広。木工権守季兼の子。下野守になる。生没年未詳。

10 仲綱 なかつな 源仲綱。源三位頼政の子。伊豆守などになったが、宇治川の戦いに敗れ、父とともに自害した。一一二六—一一八〇。